今宿五郎江遺跡 III

— 第 4 次調査報告 —

徳永A遺跡 III

— 第 3 次調査報告 —

丸隈山遺跡群 I

— 第 1 次調査報告 —

— 九州電力鉄塔建設に伴う発掘調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第479集

1996

福岡市教育委員会

IMA ZYUKU GO ROH E

今宿五郎江遺跡 III

—第4次調査報告—

TOKU NAGA

徳永A遺跡 III

—第3次調査報告—

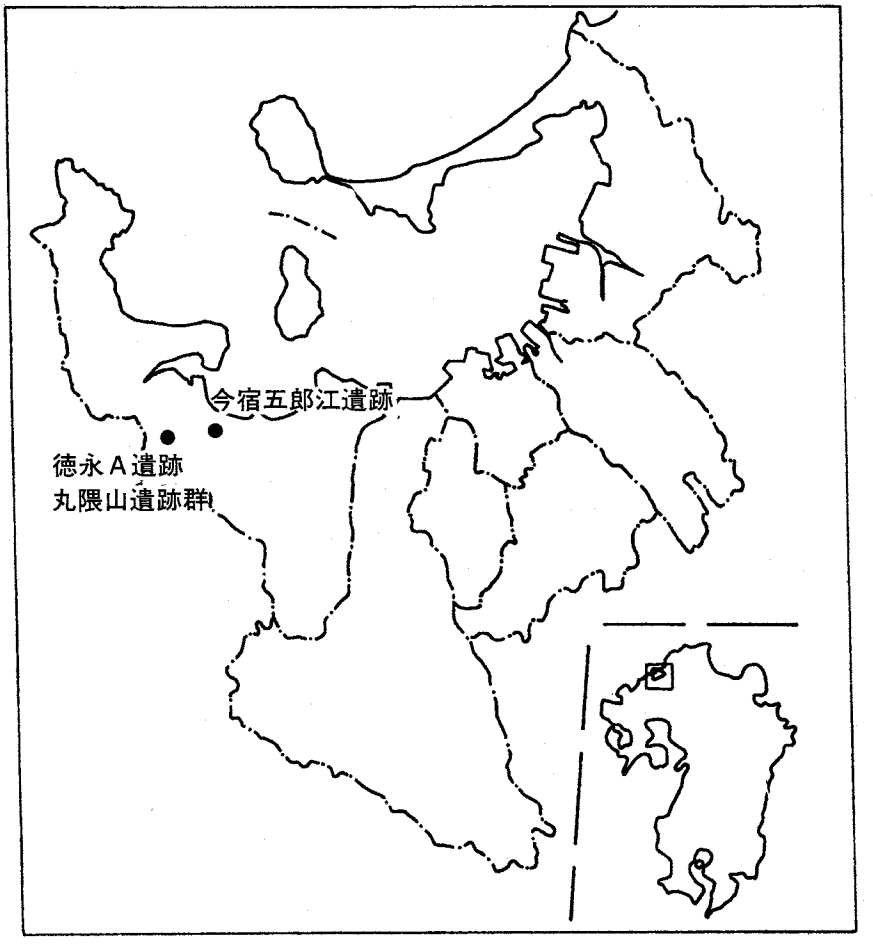
MARU KUMA YAMA

丸隈山遺跡群 I

—第1次調査報告—

—九州電力鉄塔建設に伴う発掘調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第479集



遺跡名	遺跡略号	調査番号
今宿五郎江	IZG-4	9253
徳永A	TKA-3	9354
丸隈山	MAR-1	9355

1996

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されており、それらを保護し、子孫に伝えることは私どもの義務であります。また、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市像」を目標のひとつとしてまちづくりを行なっています。

しかし、近年の都市開発事業によって貴重な先人の足跡が失われていくこともまた事実であります。このため本市教育委員会では事前に発掘調査を実施し、記録保存によって後世にそれらを伝えるよう努めています。

本書は九州電力㈱の鉄塔建設に伴って調査した西区所在の遺跡群の成果を報告するものです。今回の調査によって該地の歴史を解明する上での数多くの貴重な資料を得ることができました。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、ご理解とご協力を賜りました九州電力㈱福岡支店をはじめとする数多くの方々に対し、心から謝意を表します。

平成８年３月29日

福岡市教育委員会
教育長　尾　花　　剛

例　言

1．本書は九州電力㈱による鉄塔建設に伴い、福岡市教育委員会が発掘調査を実施した今宿五郎江遺跡第4次調査、徳永A遺跡第3次調査、丸隈山遺跡群第1次調査の報告書である。

2．本書で報告する各調査の細目は以下のとおりである。

遺　跡　名	調査次数	調査番号	遺跡略号	調査地所在地	調査面積	調　査　期　間
今宿五郎江遺跡	第4次	9253	IZG-4	西区今宿町	81㎡	1992･2･8～2･20
徳永A遺跡	第3次	9354	TKA-3	西区周船寺176-6	100㎡	1994･1･8～2･12
丸隈山遺跡群	第1次	9355	MAR-1	西区周船寺271	100㎡	1994･1･8～2･12

3．本書に掲載した遺構実測図の作成は濱石哲也・榎本義嗣・屋山洋が行なった。

4．本書に掲載した遺物実測図の作成は榎本・屋山・大塚紀宜・平川敬治・犬丸陽子が行なった。

5．本書に掲載した遺構写真の撮影は榎本・屋山が行なった。

6．本書に掲載した遺物写真の撮影は屋山・平川が行なった。

7．本書に掲載した挿図の製図は榎本・屋山・小林義彦・山口朱美・八丁由香が行なった。

8．本書で用いた方位は磁北で、真北より6°21′西偏する。

9．遺構の呼称は土坑をＳＫ、溝をＳＤと略号化した。

10．遺構･遺物番号は各調査次ごとに通し番号とした。なお、挿図中の遺物番号と図版中の遺物番号は一致する。

11．本書に関わる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。

12．本書の執筆はⅠ.を屋山、Ⅱ.を榎本が行なった。また、本田光子氏の漆、赤色顔料に関する分析を付論として掲載した。

13．本書の編集は榎本・屋山が行なった。

本　文　目　次

Ⅰ．徳永Ａ遺跡第３次調査・丸隈山遺跡群第１次調査の報告……1
　１．はじめに……1
　　１）調査に至る経過……1
　　２）調査の組織……2
　２．徳永Ａ遺跡第３次調査の記録……3
　　１）遺跡の立地と環境……3
　　２）遺構と遺物……3
　　３）まとめ……7
　３．丸隈山遺跡群第１次調査の記録……8
　　１）遺跡の立地と環境……8
　　２）遺構と遺物……8
　　３）まとめ……8
Ⅱ．今宿五郎江遺跡第４次調査の報告……9
　１．はじめに……9
　　１）調査に至る経過……9
　　２）調査の組織……9
　２．遺跡の立地と環境……11
　３．調査の記録……11
　　１）調査の概要……11
　　２）遺構と遺物……12
　　(1)土坑……12
　　(2)溝……14
　　(3)その他の遺構と遺物……15
　４．結語……44
付　論　　壺形土器に用いられた赤色顔料及び赤彩の漆膜について　　本田光子……46

挿　図　目　次

第１図　調査区周辺図（1/2,000）……1
第２図　徳永Ａ遺跡第3次調査区全体図（1/200）……2
第３図　土層図（1/80）……3
第４図　遺構図（1/20、1/40）……4
第５図　遺物実測図１（1/3）……5
第６図　遺物実測図２（1/1、1/3）……6
第７図　丸隈山遺跡群第1次調査区全体図（1/120）……8
第８図　周辺遺跡分布図（1/10,000）……9
第９図　今宿五郎江遺跡第4次調査区周辺図（1/600）……10
第10図　遺構配置図（1/100）……10

第11図　調査区南壁土層図（1/60）……11
第12図　土坑実測図（1/20）……12
第13図　土坑出土遺物実測図（1/4）……13
第14図　木器出土状況実測図（1/50）……15
第15図　木器実測図1（1/4）……16
第16図　木器実測図2（1/4）……17
第17図　木器実測図3（1/4）……18
第18図　木器実測図4（1/4）……19
第19図　木器実測図5（1/4）……20
第20図　包含層上層出土遺物実測図1（1/4）……22
第21図　包含層上層出土遺物実測図2（1/4）……23
第22図　包含層上層出土遺物実測図3（1/4）……24
第23図　包含層上層出土遺物実測図4（1/4）……25
第24図　包含層上層出土遺物実測図5（1/4）……26
第25図　包含層上層出土遺物実測図6（1/4、1/6）……27
第26図　包含層上層出土遺物実測図7（1/4、1/6）……29
第27図　包含層上層出土遺物実測図8（1/4）……30
第28図　包含層上層出土遺物実測図9（1/4）……31
第29図　包含層上層出土遺物実測図10（1/4）……33
第30図　包含層上層出土遺物実測図11（1/4）……34
第31図　包含層上層出土遺物実測図12（1/4）……36
第32図　包含層上層出土遺物実測図13（1/3、1/4）……37
第33図　包含層上層出土遺物実測図14（2/3、1/3）……39
第34図　包含層上層出土遺物実測図15（1/1、2/3、1/2、1/3）……40
第35図　包含層下層出土遺物実測図1（1/4、1/6）……42
第36図　包含層下層出土遺物実測図2（1/1、1/2、1/3、1/4）……43
第37図　今宿五郎江遺跡集落位置図（1/1,000）……45

図　版　目　次

図版1　徳永A遺跡　(1)調査区全景（東から）　(2)西壁土層　(3)北壁土層
(4)SK11（東から）　(5)SK02土層（南から）
図版2　徳永A遺跡・丸隈山遺跡群　(1)飛行機格納庫北壁（東から）（徳永A遺跡）(2)格納庫排水施設（徳永A遺跡）
(3)丸隈山遺跡群第1次全景（南から）
図版3　徳永A遺跡出土遺物
図版4　今宿五郎江遺跡　(1)調査区全景（北から）(2)南壁土層（北東から）(3)木器出土状況（南から）
図版5　今宿五郎江遺跡　(1)SK001（北から）　(2)SK002（東から）　(3)SK010（南から）
図版6　今宿五郎江遺跡　(1)包含層遺物出土状況 (2)鉄斧出土状況　(3)包含層掘り下げ風景
図版7　今宿五郎江遺跡出土遺物I
図版8　今宿五郎江遺跡出土遺物II

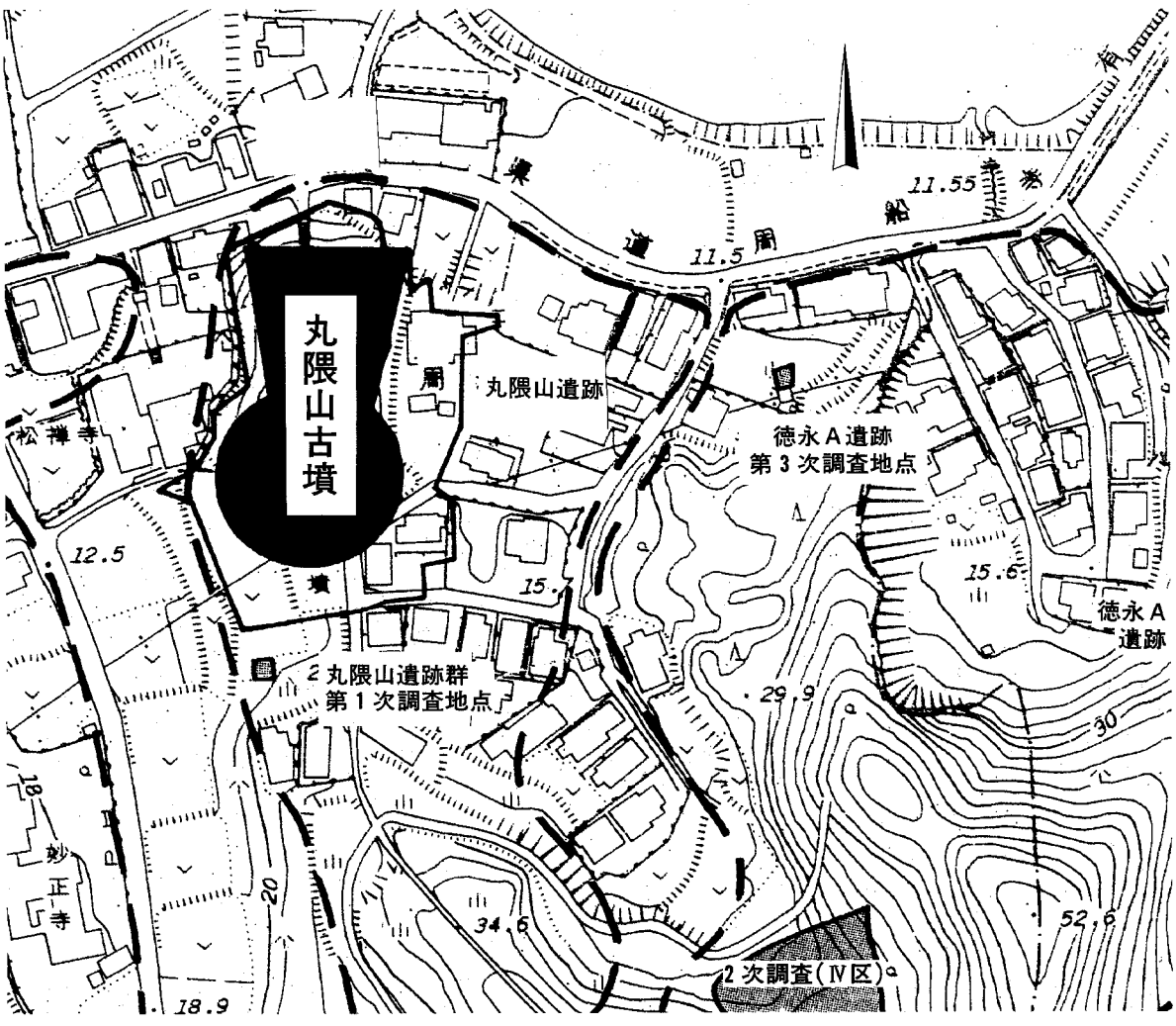
Ⅰ．徳永Ａ遺跡第３次調査･丸隈山遺跡群第１次調査の報告

１．はじめに

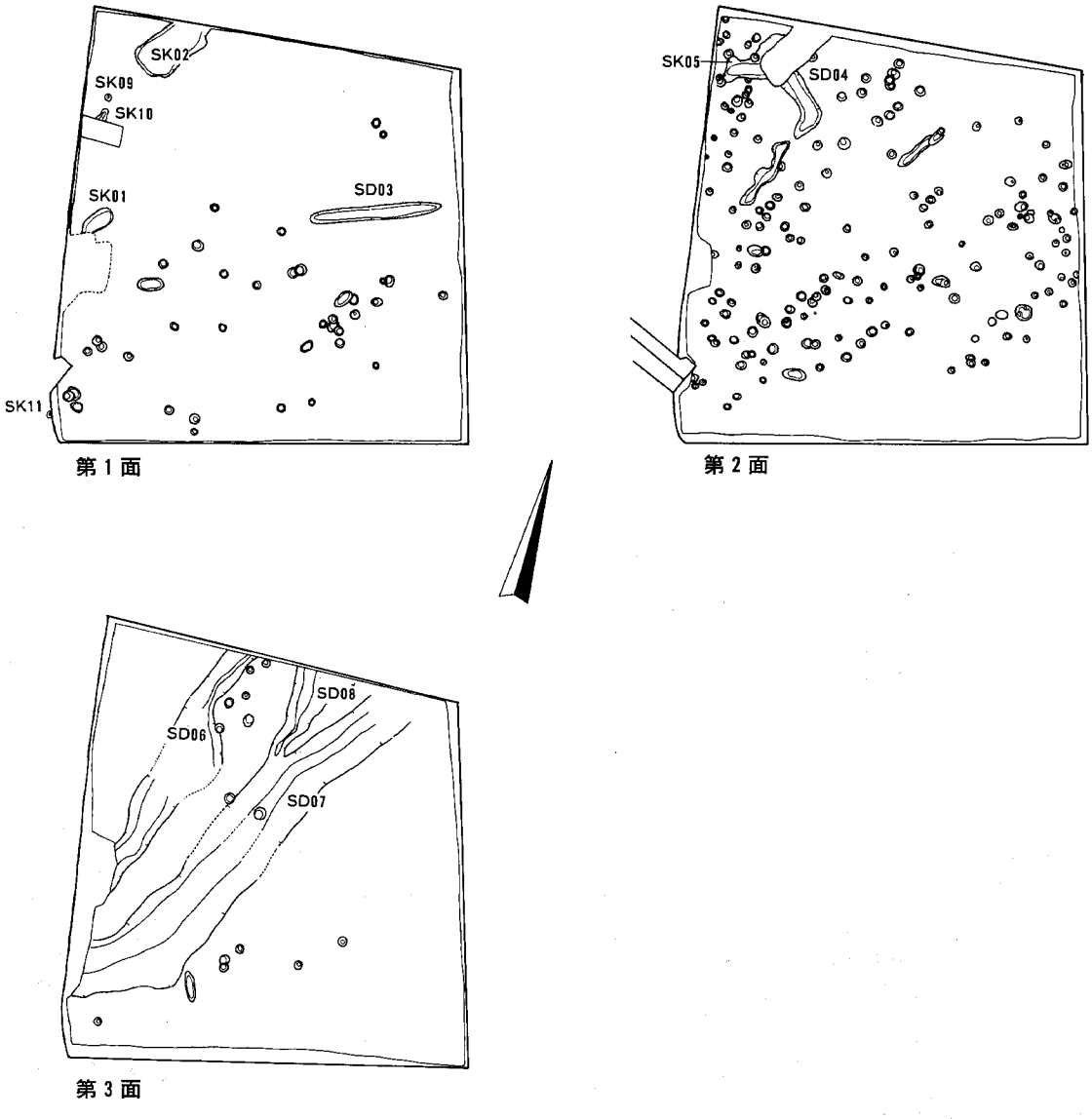
1)調査に至る経過

1993年９月17日に九州電力㈱福岡支店から架空送電線今宿前原線の増強工事に伴う本鉄塔の建設における埋蔵文化財の有無についての事前審査願いが出され、1993年12月16日に試掘調査を行った。その結果本鉄塔No.10（徳永Ａ遺跡）・No.11（丸隈山遺跡群）で古墳時代～古代の遺構を確認したため、工事に先行して発掘調査が必要であると判断し、申請者との協議の結果1994年１月８日から２月12日まで調査を行った。調査では九州電力㈱立地事務所の多大な御協力を得た。深く御礼申しあげたい。

徳永遺跡群はこれまで一般国道202号線今宿バイパス建設に伴って調査が行われている。１次調査は1988年（昭和63年）４月１日～11月10日にＩ区・II区の調査が行われ、Ｉ区では中世の土壙及び掘立柱建物、II区では越州窯系青磁を中心とする包含層等を検出している。(『徳永遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第242集)。２次調査は1989年(平成元年)１月16日～３月31日までIII区・IV区の調査を行った。(『徳永遺跡(II)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第306集)。その後平成６年の福岡市文化財分布地図(西部II)の改訂により徳永遺跡はＡとＢの二つに分かれＩ区がＢ遺跡に、II～IV区がＡ遺跡になったのでＩ区をＢ遺跡の１次調査、II区をＡ遺跡の１次調査、III・IV区を２次調査とし、Ａ遺跡の報告は第242集と第306集の２冊が出ているので本報告書は『徳永Ａ遺跡(III)』とした。



第１図　調査区周辺図(1/2,000)



第2図　徳永A遺跡第3次調査区全体図(1/200)

2) 調査の組織

調査委託　九州電力㈱

調査主体　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課第1係

調査総括　埋蔵文化財課長　折尾学
埋蔵文化財課第1係長　横山邦継

調査庶務　埋蔵文化財課第1係　　吉田麻由美

調査担当　埋蔵文化財課第1係　　屋山洋

調査作業　桐山信保　中村昭市　楢崎耕助　小金丸ミネ子　末松タツエ　末松美佐子　友池冨美恵
波多江喜美子　堀田昭　真鍋キミエ

整理作業　神谷玲子　黨早津紀　黨早苗　浜野亜希子　浜野年代　山口初子

2．徳永Ａ遺跡第３次調査

1) 遺跡の立地と環境

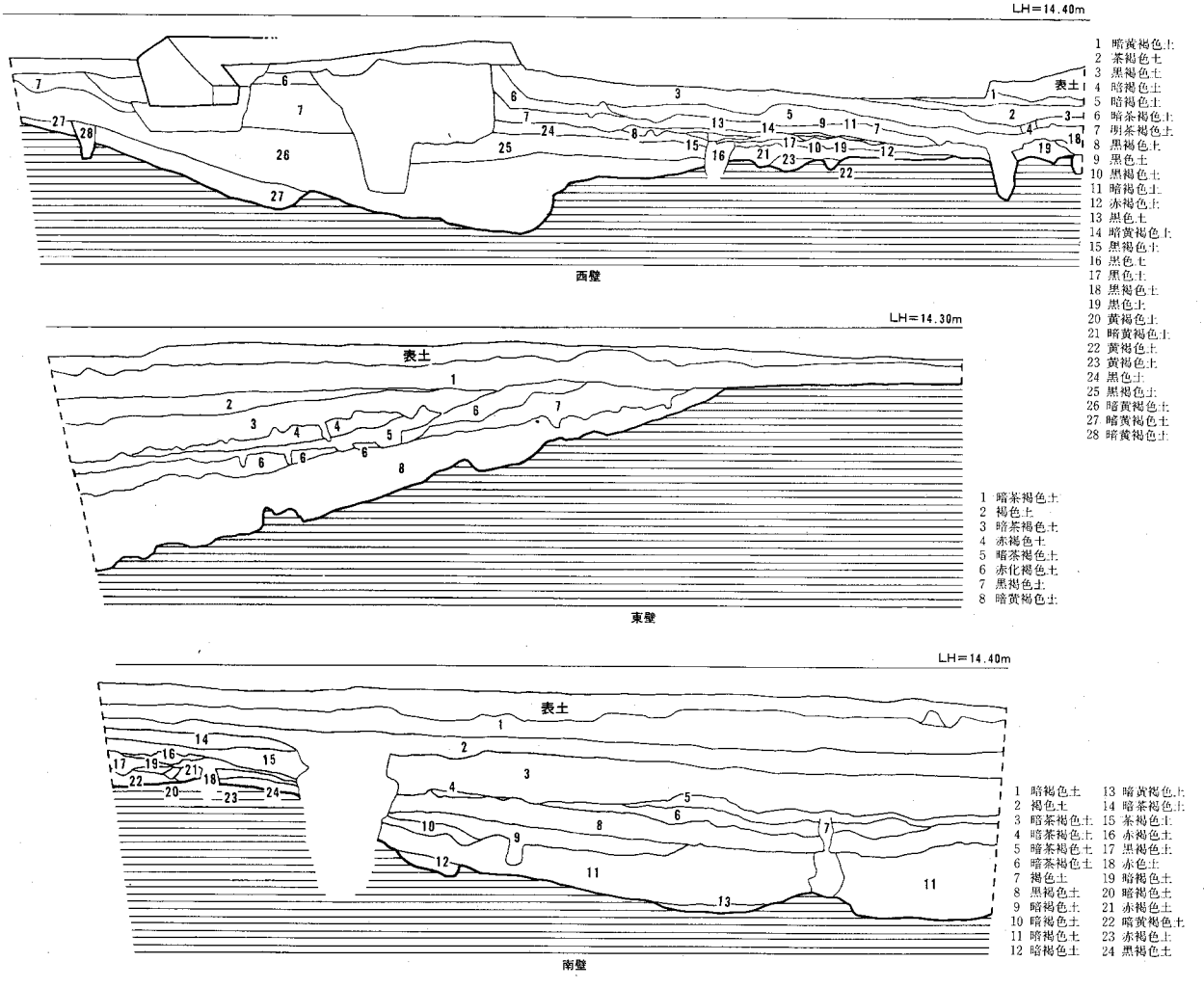
本調査地点は高祖山から北に延びる丘陵の先端部に位置する。戦時中の飛行機格納庫等の築造や最近の宅地造成によって地形の変化が著しい。調査区は北東に傾斜しており、南側から土砂の流入がみられる。標高は最高所で約14.0mを測る。調査区の南側は戦時中に飛行機の格納庫として 1m程削平されており、現在でも格納庫の外壁の基礎部分が残存している。

2) 遺構と遺物

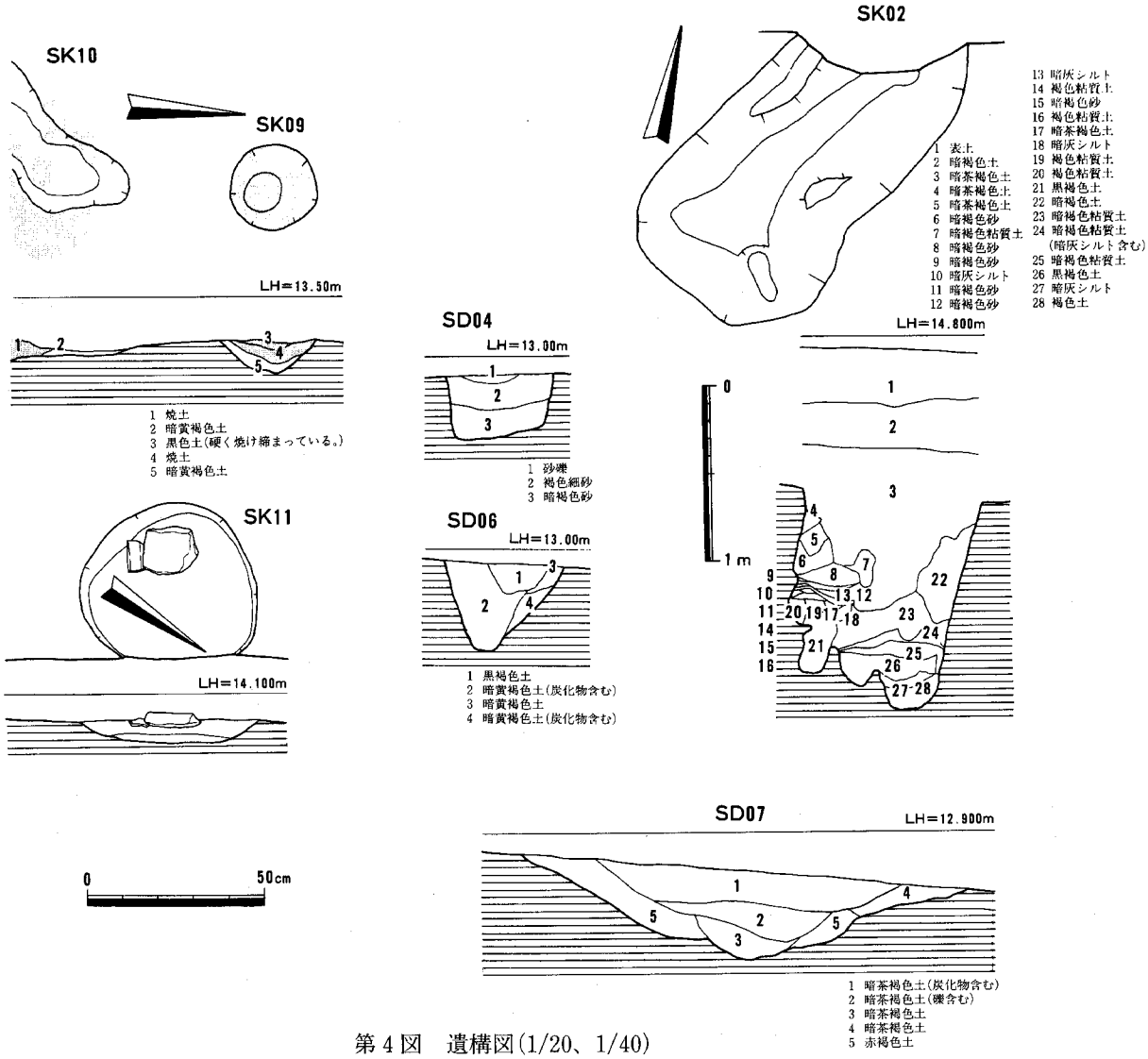
包含層出土遺物

第１層　表土下30cmで検出した。厚さは20～40cmを測る。出土遺物（001～006）001・002は須恵器坏蓋である。 001は暗青灰色でつまみの断面は三角形を呈す。002は灰白色を呈す。003は須恵器坏である。灰白色を呈す。底径6.3cm、口径10.9cm、高さ3.7cmを測る。調整は内外面とも横ナデで、底部は回転ヘラ切りを施す。004は土師器甕である。調整は磨滅のため不明である。005は椀形滓である。表面に小さな気泡が多く見られる。331gを測る。006は金床石である。表面は黒色を呈し、かなり焼けており一部研いだような痕跡が見られる。

第２層　暗茶褐色を呈し、厚さ約40cmを測る。土器片・鉄滓・炭化物を多く含む。出土遺物（007～014）007～ 009は須恵器坏蓋である。007は暗灰褐色を呈し、口径は16.9cmを測る。008は暗灰色を呈す。胎土は１㎜以下の砂を含み、やや粗めである。内面にヘラ記号を有す。009は灰白色を呈し、胎



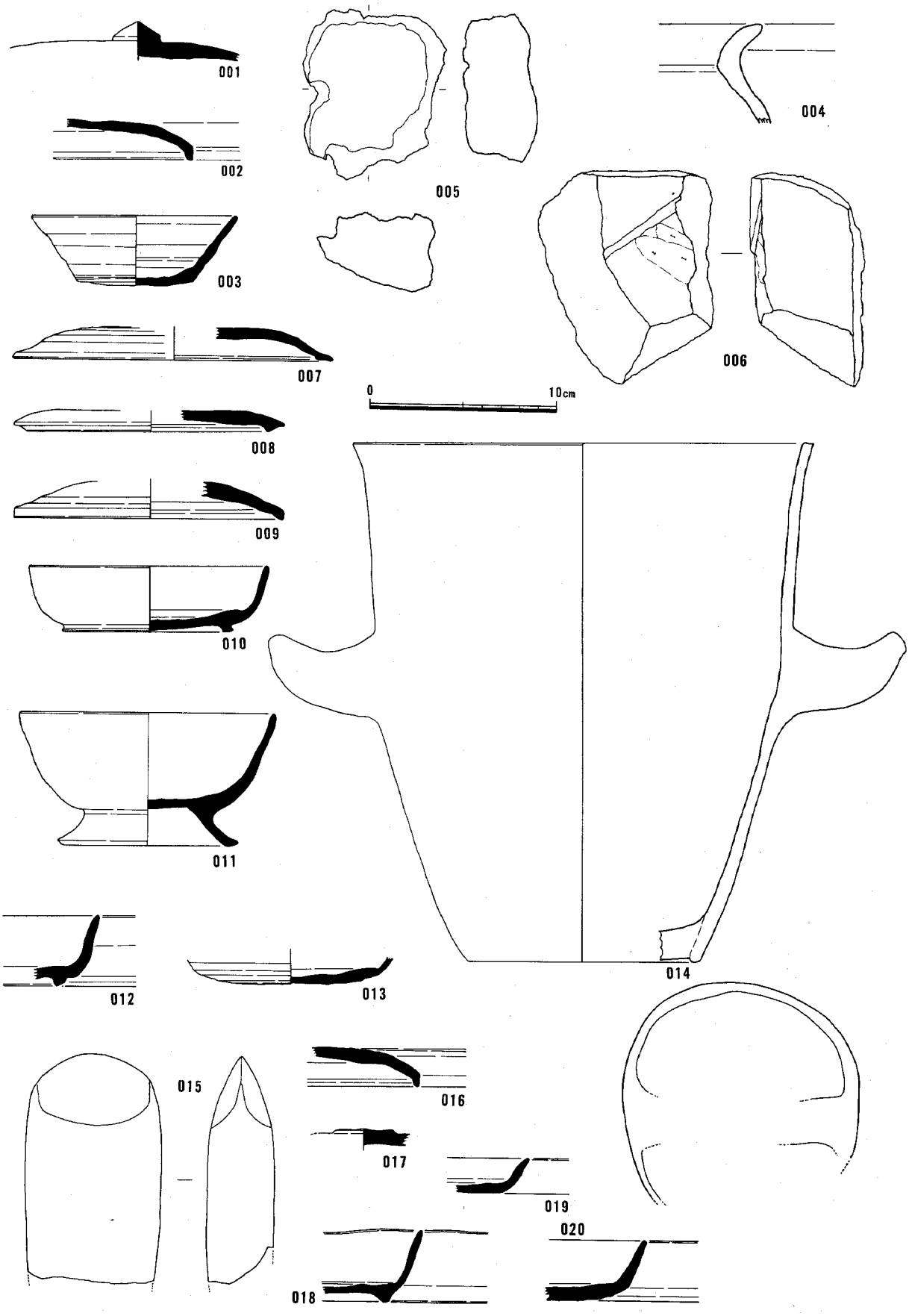
第３図　土層図(1/80)



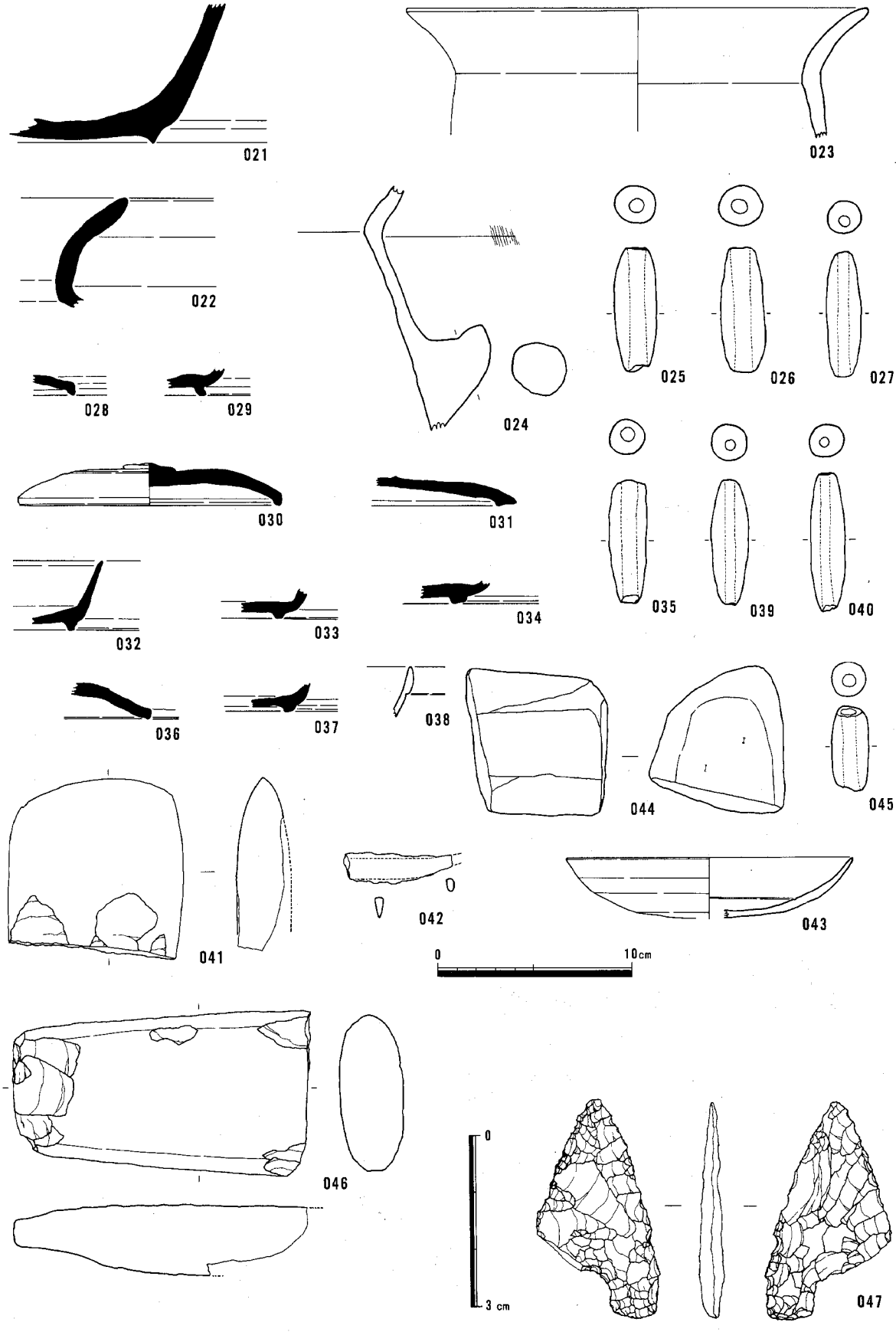
第4図　遺構図(1/20、1/40)

土はやや粗い。010～012は須恵器高台付坏である。010は灰白色を呈し、胎土は0.5mmほどの白色砂を含む。口径12.6cm、底径9.1cm、高さ3.5cmを測る。底部は回転ヘラ切りである。011は暗青灰色を呈す。口径13.6cm、底径9.6cm、高さ7.1cmを測る。012は暗青灰色を呈す。高さ 3.9cmを測る。013は須恵器坏である。灰色を呈し、底径6.4cmを測る。底部はヘラ削り、その他はナデ調整である。014は土師質の甑である。暗赤褐色を呈す。口径22.5cm、底径12.6cm、高さ27.4cmを測る。底部はなく、幅2.3cm、厚さ1.3cmの粘土帯がつく。表面は磨耗しており、調整は不明である。015は安山岩製磨製石斧の刃部である。

第3層　明茶褐色を呈す。厚さ10～50cmを測る。出土遺物(016～027)016・017は須恵器坏蓋である。016は暗灰褐色を呈す。018は須恵器高台付坏である。暗灰褐色を呈す。高さ3.8cmを測る。019・020は須恵器坏である。019は暗赤褐色を呈す。高さ1.9cmを測る底部ヘラ削りである。020は灰白色で高さ3.1cmを測る。021は須恵器鉢である。灰褐色を呈し、ナデ調整をおこなっている。胎土は精良である。022は須恵器甕である。灰褐色を呈す。023・024は土師質の甕である。023は明橙色を呈す。口径23.8cmを測る。表面は風化のため、調整は不明である。024は白色を呈し、把手をもつ。調整は表面が刷毛目、内面は削りを施している。025～027は土師質の土錘である。025は明橙色を呈す。長さ6.5cm、太



第5図　遺物実測図1 (1/3)



第 6 図　遺物実測図 2 (1/1、1/3)

さ2.2cmを測る。026は灰白色を呈し、長さ6.5cm、太さ2.3cmを測る。027は黒色を呈し、長さ6.6cm、太さ1.8cmを測る。044は砥石である。

第4層　黒褐色を呈す。厚さ20～30cmを測る。出土遺物(028・029)028は須恵器坏蓋である。灰褐色を呈し、胎土は2㎜程の砂を多く含む。029は須恵器高台付坏である。灰色を呈し、胎土は粗い。

第5層　暗黄褐色を呈し、厚さ15～45cmを測る。046は玄武岩製の石斧である。刃部を欠く。左側縁に石材を擦り切った痕跡を残す。

第1面

検出時出土遺物(030～033)030・031は須恵器坏蓋である。030は灰色を呈し、口径13.6cm、高さ2.2cmを測る。胎土は精良である。031は灰色を呈す。外面調整はカキ目を施している。032・033は須恵器高台付坏である。

ＳＫ01　95cm×43cm、深さ80cmを測る。覆土は白色砂が堆積している。出土遺物は須恵器片・土師器甕口縁等が出土しているが、いずれも小片で図化できなかった。

ＳＫ02　調査区の西北端に位置する。遺構の北側が調査区外に延びるが、現状で209cm×113cm、深さ121cmを測る。出土遺物(034・035)034は須恵器高台付坏である。灰白色を呈す。035は土師質の土錘である。片側が欠損している。現状で長さ6.4cm、太さ1.9cmを測る。

第2面

ＳＫ09(第4図)炉である。調査区西北側に位置する。円形を呈し、径24cmを測る。断面はレンズ状に赤化し、その上面は黒色化し硬く焼け締まっている。出土遺物なし。

ＳＫ10(第4図)炉である。ＳＫ09の南側に位置する。溝状に窪んでおり、周辺が幅40cmにわたって赤化している。出土遺物無し。

ＳＫ11(第4図)炉である。調査区の西南端に位置する。東側を削平されているが、ほぼ円形を呈し径50cmを測る。焼土面から浮いて偏平な石が出土している。

ＳＤ04　調査区の西北端に位置する。北に流れるが途中で西に向きを変え、ＳＫ02に切られる。出土遺物(036～041)036は須恵器坏蓋である。暗青灰色を呈す。037は須恵器高台付坏である。赤褐色を呈し、内外面とも横ナデを施す。038は玉縁の白磁碗片である。胎土はやや粗い。039・040は土師質の土錘である。039は長さ6.5cm、幅1.9cm、040は長さ7cm、幅1.7cmを測る。041は玄武岩製の磨製石斧の刃部である。042は刀子片である。

ＳＫ05　調査区の西北隅に位置する。不整形の長方形を呈し、1.9m×1.1m。深さ68cmを測る。出土遺物。043は土師器椀である。復元口径14.9cmを測る。明橙色で胎土は砂を含む。

第3面

ＳＤ06　調査区西側に位置する。北に流れる。深さは最大で40cm、幅20cmを測る。出土遺物。弥生時代の甕底部片が出土した。

ＳＤ07　調査区北側に位置する。北に流れる。幅は約3.6m、深さ60cmを測る。層の中程に礫が多く見られる。須恵器坏片や白磁小片が出土している。

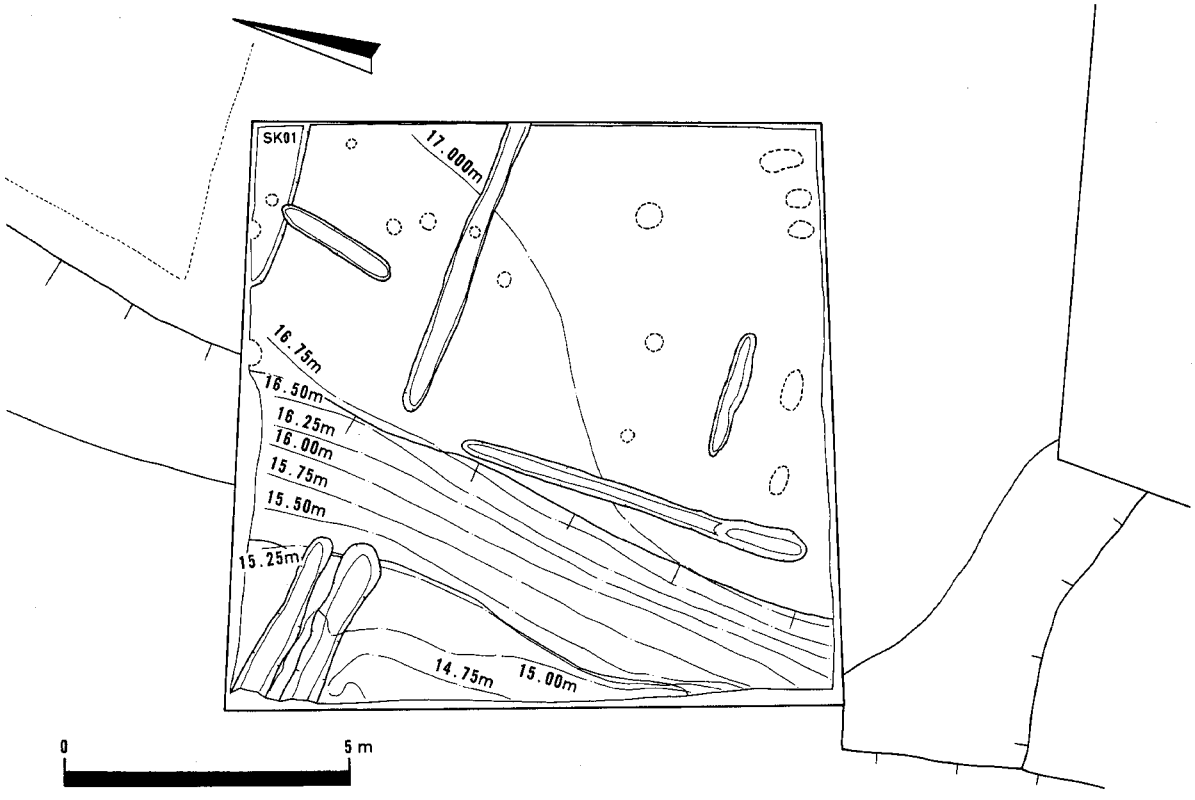
ＳＤ08　ＳＤ07から分かれ、北西に流れる。幅25～80cm、深さ30cmを測る。出土遺物なし。

その他047は黒曜石製の石鏃である。調査区周辺で採取した。

3)まとめ

調査区全体が北に傾斜する浅い谷のため明確な生活遺構は確認できなかった。調査区西端で炉や柱穴を確認したのと包含層の遺物が主に南側からの流れ込みなので、西側のやせた尾根の上に集落が存在したものと思われる。

3．丸隈山遺跡群第１次調査



第７図　丸隈山遺跡群第１次調査区全体図(1/120)

1)遺跡の立地と環境

本調査地点は丸隈山古墳の南方30mの地点に位置する。丸隈山古墳の後円部南側は南北幅30mにわたって削平されており、その南端に位置するため南側の家屋と２m近い段差がある。また、丸隈山古墳がのる丘陵の西側の段落ちを跨いでおり、調査区は東西両端で202cmの高低差がある。本調査区は概要に述べたように高架送電線の基礎構造部分についての調査で、調査区は１片10mの方形を呈する。調査区の現状は畑である。耕作土は明橙色を呈する花崗岩のばいらんで腐植土を殆ど含まない。耕作土を20cm程下げたところで遺構を確認した。

2)遺構と遺物

ＳＫ01　調査区の北東端に位置する。調査区外に延びるが現状で長さ290cm、幅80cm、深さ12cmを測る。覆土は単層で明褐色を呈す。土師質の土器片が１点出土した。

その他　ピット状の遺構と思われたのは殆どが現代の塵捨て穴であった。塵が出ていない穴も覆土がほぼ同じため同様の性質であると思われる。溝については段の下まで続くことから排水用の溝であると思われるが、遺物の出土は無く、時期は不明である。覆土は灰色を呈し、締まりがかなり緩いので新しい可能性が高いものと考えている。

3)まとめ

南側との段落ちは丸隈山古墳築造時の丘尾切断の可能性が考えられるが、近年の畑の開墾等でもかなりの削平を受けたものと思われ、当時の状況を残しているとは考えにくい。また、調査区北側で８世紀の須恵器の高台付坏の小片を採集した。

II. 今宿五郎江遺跡第4次調査の報告

1．はじめに

1) 調査に至る経過

1992年(平成4年)6月26日付けで、九州電力㈱福岡支店より架空送電線路今宿前原線の増強工事に伴う仮鉄塔建設地内における埋蔵文化財の有無についての事前審査願が本市教育委員会に提出された。この仮鉄塔は福岡市西区の今宿変電所より前原市の前原変電所に至る42箇所に設置が予定されるものであった。申請地の数十箇所が埋蔵文化財包蔵地に含まれることより、教育委員会埋蔵文化財課では1993年1月18・19日に試掘調査を実施した。その結果、今宿五郎江遺跡内に設置予定の仮鉄塔No.1地内において遺構・遺物を確認し、工事に先行して発掘調査が必要であると判断した。その後の申請者との協議の上、2月8日より記録保存のための発掘調査を開始することとなった。

2) 調査の組織

調査委託：九州電力㈱福岡支店

調査主体：福岡市教育委員会

調査総括：埋蔵文化財課長　折尾　学(前任)　荒巻輝勝
同課第1係長　飛高憲雄(前任)　横山邦継

事前審査：同課主任文化財主事　横山邦継(試掘)
同課文化財主事　荒牧宏行(試掘)

調査庶務：同課第1係　吉武麻由美(前任)　西田結香

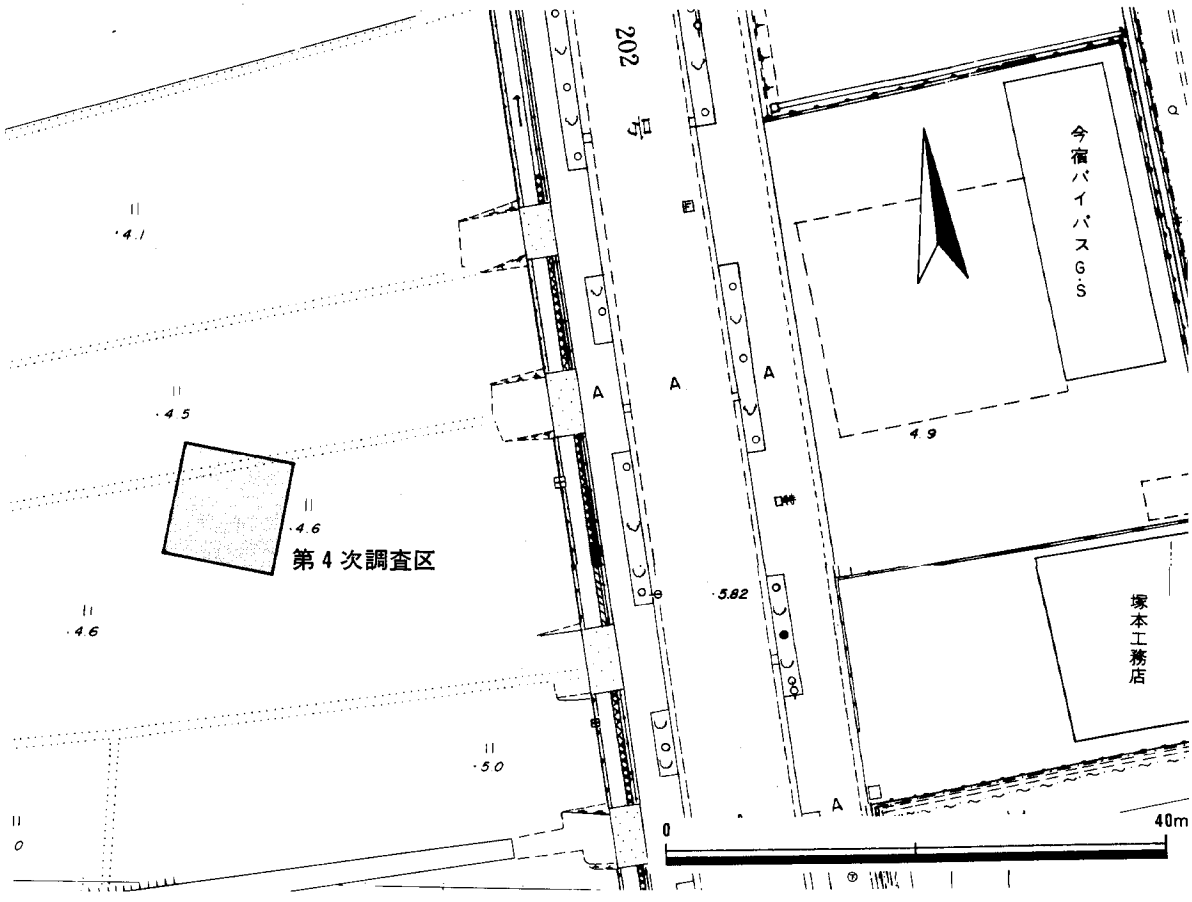
調査担当：同課主任文化財主事　濱石哲也
同課第1係文化財主事　榎本義嗣

整理調査員：平川敬治　山口朱美　犬丸陽子　八丁由香

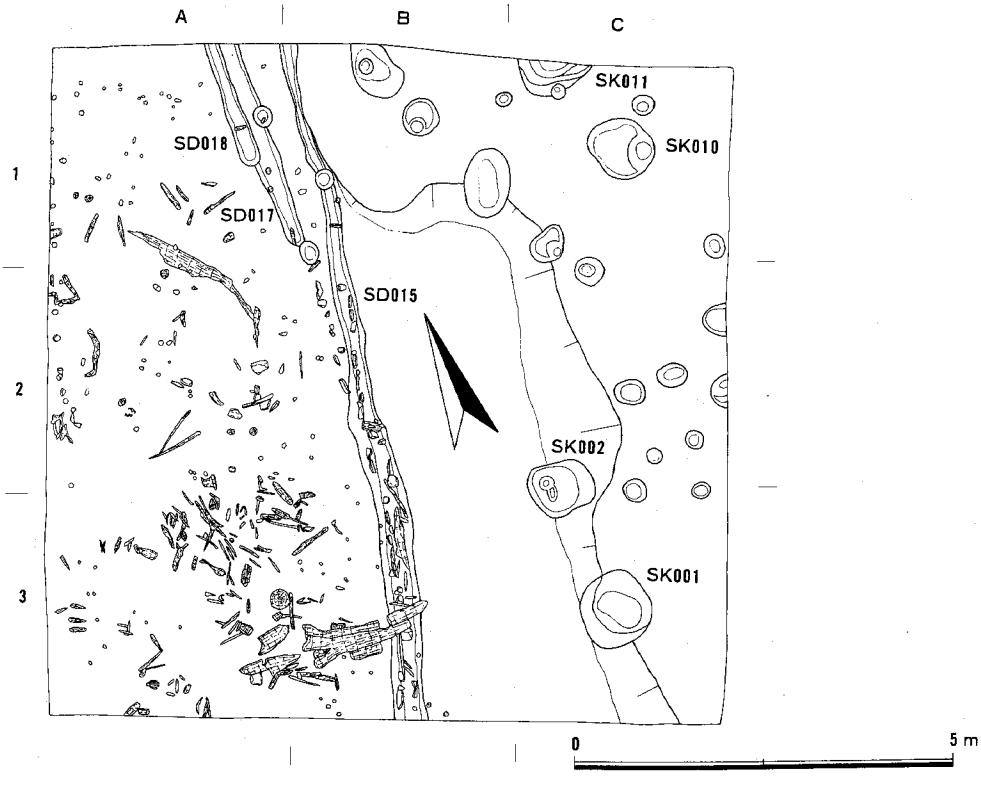
整理作業：西島信枝　松尾真澄

なお、発掘調査が無事終了できたのは多数の作業員及び九州電力㈱立地事務所をはじめとする関係各位のご協力の賜である。深く御礼申し上げたい。

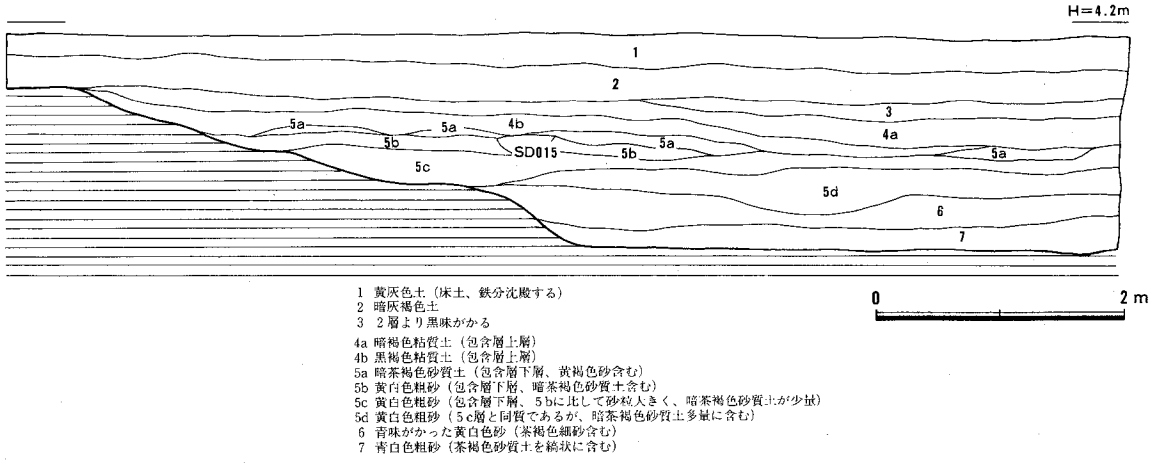
第8図　周辺遺跡分布図(1/10,000)



第9図　今宿五郎江遺跡第4次調査区周辺図(1/600)



第10図　遺構配置図(1/100)



第11図　調査区南壁土層図(1/60)

2．遺跡の立地と環境

今宿五郎江遺跡の位置する今宿平野は糸島平野の東縁部に開ける小平野で、東側を脊振山系より北に派生する飯盛・長垂山山塊によって早良平野と画され、南・西側は高祖山の山塊によって区切られる。北側の今津湾に面した海浜部には砂丘が弧状に展開し、後背地にはラグーンが拡がる。また、平野東部には小河川によって小規模な扇状地が形成される。

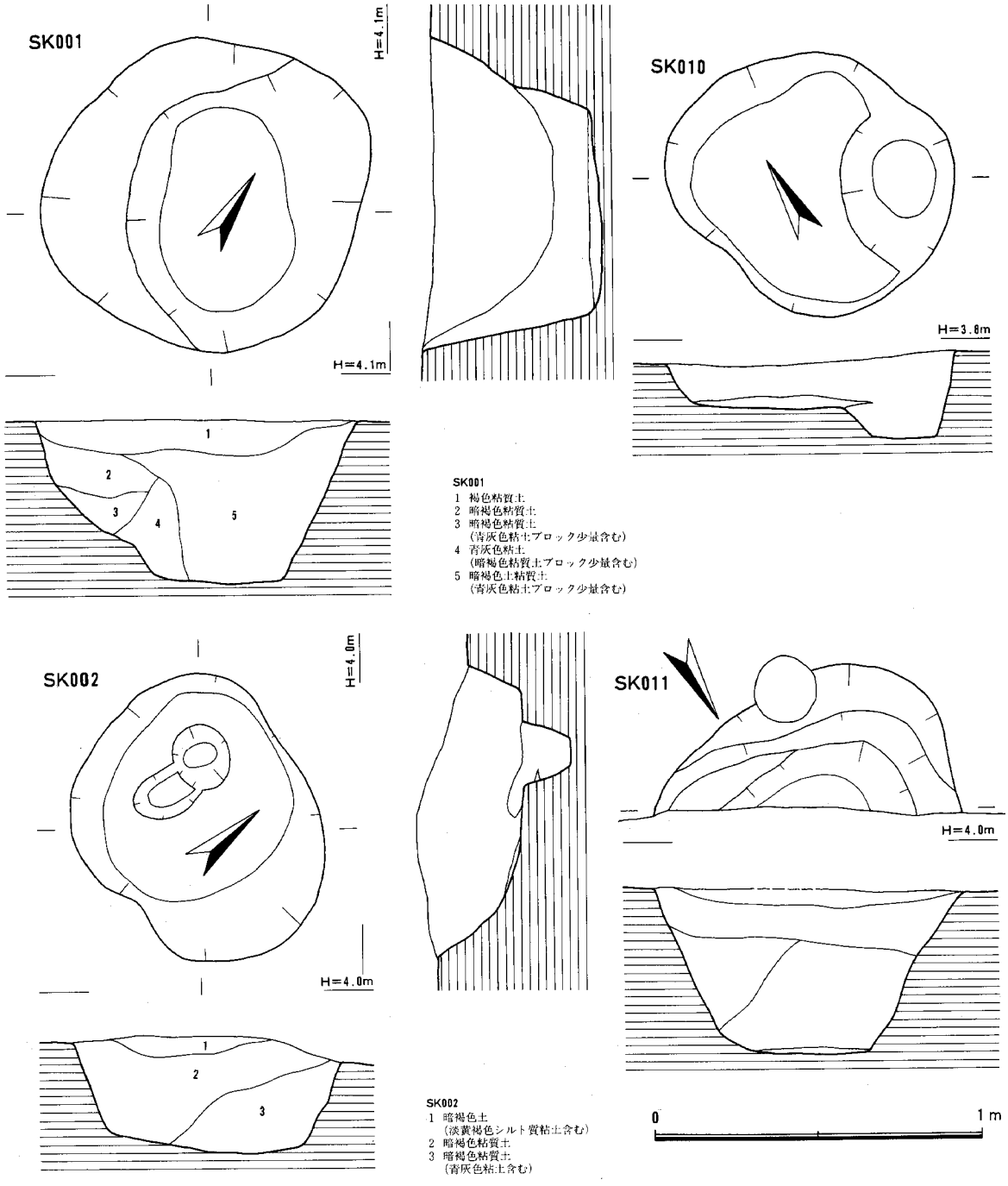
今回報告する今宿五郎江遺跡第４次調査区は高祖山より北に派生する低台地西側の落ち際に位置し、台地上では標高約4.0mを測る。これまでに本遺跡群内では３次の調査が実施されており、台地先端での第１次調査では弥生時代後期の環濠が検出された。また本調査区の東側の台地上で行なわれた第２・３次調査では、弥生時代中期～後期を中心とする溝・掘立柱建物・土坑等が確認されている。特に溝からは小銅鐸を始めとして多量の土器・木製品・石製品が出土している。

3．調査の記録

1)調査の概要

調査区の現況は休耕中の水田で、仮鉄塔建設予定地である一辺９mの81㎡を測る正方形が調査対象地である。1992年２月８日に重機により表土剥ぎを行い、遺構精査、掘り下げを開始した。16日に全景写真を撮影し、20日に器材を撤収、調査を終了した。

上述したように本調査区は台地の落ち際に位置し、台地端部が調査区の南東から北西にはしる。黄白色粘土の台地上では弥生時代中期末～後期初頭の土坑、ピットが検出された。西側の谷部に向かって傾斜し、下位では青灰色粘土が基盤となる。台地際から谷部にかけては遺物を多量に含む包含層が形成される。まず、暗褐色粘質土・黒褐色粘質土層(第11図４ａ・４ｂ層)中の遺物を包含層上層遺物として取り上げた。その下層の５層群の砂層上では溝(ＳＤ015・017・018)、杭列を検出した。また、５層群も包含層で、特に５ｂ・ｃ層では自然木を含む木器群が出土した。なお、５層群中の遺物は包含層下層遺物として取り上げている。５ｄ層には土器・木器は含まれず、自然木片のみが認められた。以下６・７層と砂層が続き、基盤の青灰色粘質土に至る。なお、５ｄ層以下は調査区南北壁面沿いでのトレンチ調査にとどめた。包含層遺物は木器を除いては調査区に３m四方のグッリドを設定し(Ａ～Ｃ－１～３区:第10図)取り上げを実施した。包含層には弥生時代中期～後期の土器を主体に、鉄斧・銅鏃・石錘・木器等多様な遺物が出土し、総量はパンケース120箱に及んだ。



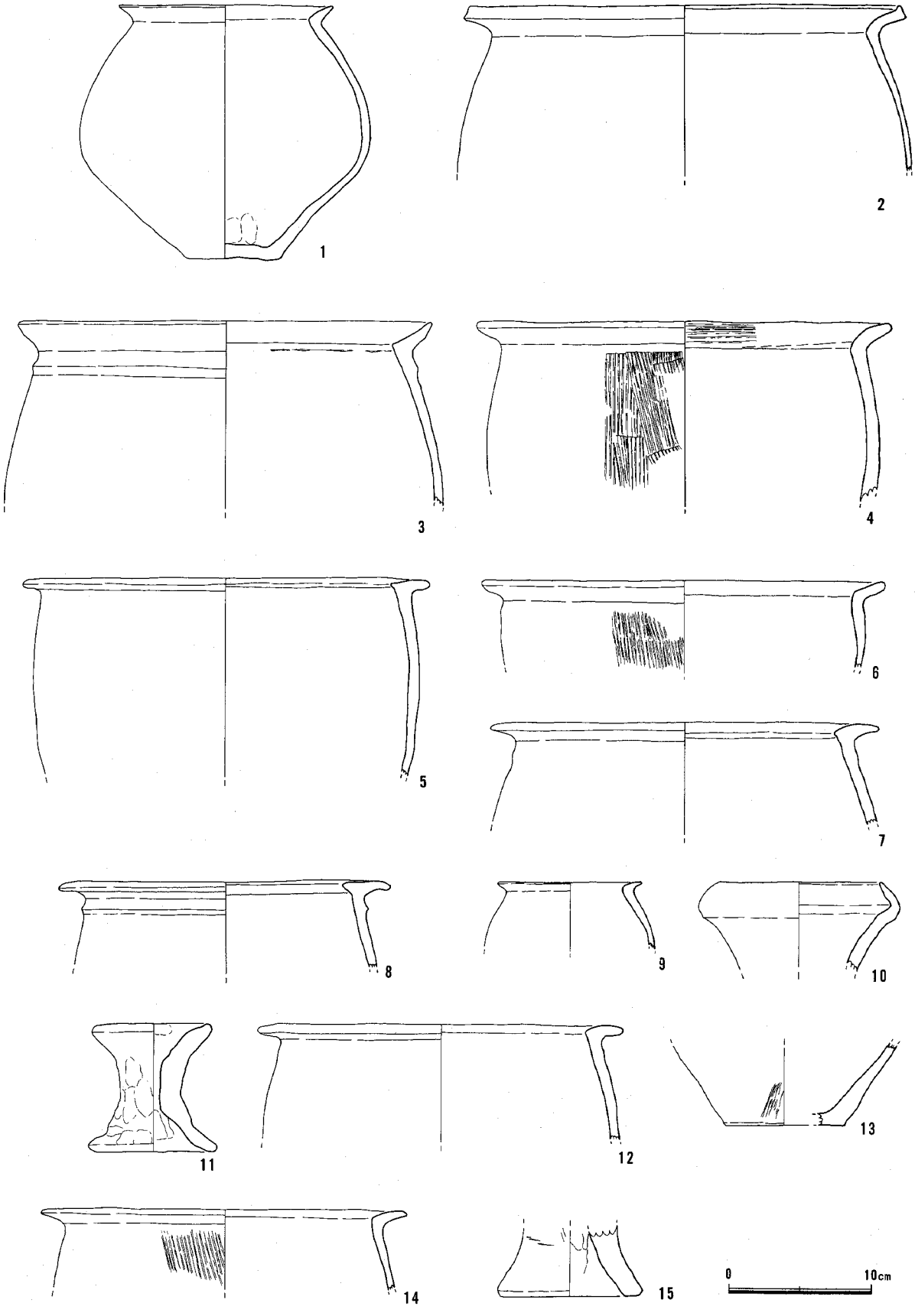
第12図　土坑実測図(1/20)

2)遺構と遺物

(1)土坑

ＳＫ001(第12図)　Ｃ－３区の台地落ち際に位置し、底面は青灰色粘土層まで掘り込まれる。不整な円形を呈し、径0.95～1.05m、深さ0.5mを測る。断面は逆梯形を呈する。２層・３層は土坑埋没途中に掘り込まれたピット状遺構と考えられる。

出土遺物(第13図１・第16図38)　弥生土器甕・壺、安山岩剥片の他に、底面では木器、自然木が出土した。土器は細片が多い。１は無頸壺で、胴の張る体部に短く折れる口縁部を有する。外面は器面が



第13図　土坑出土遺物実測図(1/4)

磨滅し調整は不明であるが、内面は底部を指オサエ、体部をナデる。38はスギの芯持ちを用いた加工材である。他にも同様の材が1点出土している。

ＳＫ002(第12図)　Ｃ－２区の台地落ち際で検出した。不整な楕円形を呈し、長径0.9m、短径0.7m、深さ35cmを測る。断面は底面が緩く湾曲する逆梯形をなす。底面にはピット状の掘り込みが認められ、ＳＫ001と同様に青灰色粘土層まで達する。

出土遺物(第16図39)　弥生土器甕・壺・鉢、木器が出土した。土器は細片が大半で図化し得ない。39は底面で出土した材である。端部に加工を施す。厚さ3.6cmを測る。

ＳＫ010(第12図)　Ｃ－１区で検出した不整円形の土坑である。径0.8～0.9m、深さ0.15mを測る。東側には円形で径0.4m、底面からの深さ0.1mの掘り込みを有する。なお、上面はトレンチ掘削時に0.1m程度削平される。

出土遺物(第13図２～４)　いずれも弥生土器甕である。２はやや胴の張る体部に内傾する逆「Ｌ」字状口縁を有し、端部内面は鈍くつまみ上げる。口縁部はヨコナデ、内面はナデを施し、外面は磨滅する。３は逆「く」字状口縁を呈し、口縁下に低い三角突帯を巡らせる。口縁部内面はヨコナデによって緩く窪み、端部は尖り気味に収める。内外面は器面が荒れる。４の口縁部は逆「く」字状に近く、内面の稜線は緩い。外面及び口縁部内面は刷毛目、口縁部外面はヨコナデ、内面は粗いナデ調整である。

ＳＫ011(第12図)　Ｃ－１区に位置し、北側は調査区外に延びる。現存で径0.9m、深さ0.5mを計り、断面は逆梯形を呈する。覆土は淡灰褐色粘質土で、青灰色粘土層まで掘り込まれる。

出土遺物(第13図５)　弥生土器甕で、逆「Ｌ」字状口縁の内唇部に粘土を貼り付け、鈍くつまみ出す。口縁部内外面はヨコナデが残るが、他は磨滅がすすむ。

(2)溝

台地落ち際に沿うように小規模な３条の溝が検出された。いずれも４層群(包含層上層)除去後の５層群(包含層下層)のうち５ｂ層より掘り込まれる。覆土は暗茶褐色土である。

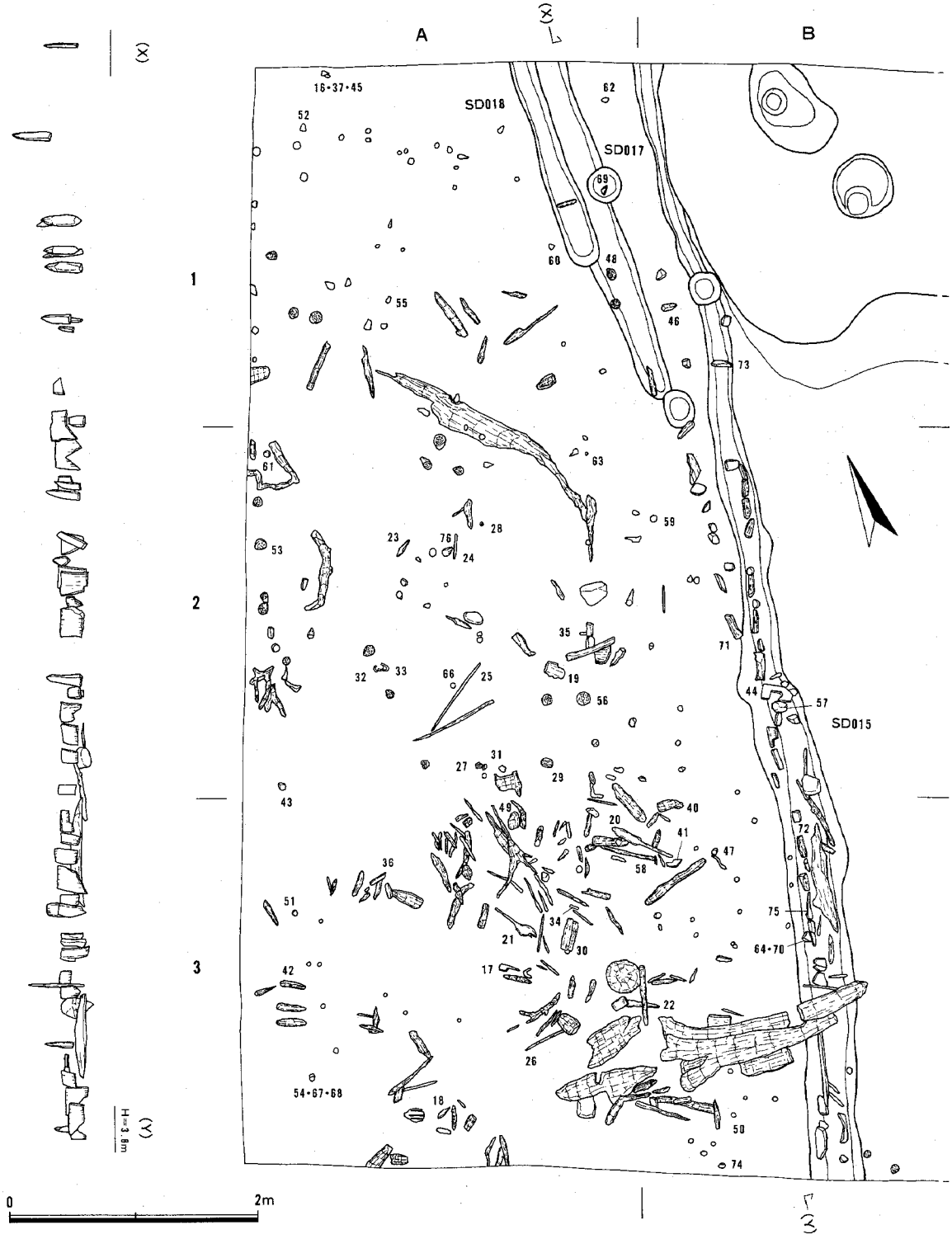
ＳＤ015(第14図)　Ｂ区を北流し、両端は調査区外に位置する。幅20～50cm、深さ20cmを測る。南側では自然木の流れ込みが認められる。

出土遺物(第13図６～11)　弥生土器甕・壺・器台等が出土した。６～８は甕で、６は内傾気味の逆「Ｌ」字状口縁部を有するもので、口縁部内面の稜は緩い。体部外面は刷毛目、口縁部はヨコナデ、内面はナデを施す。外面には煤が付着する。７は逆「Ｌ」字状口縁の内唇部をつまみ出す。体部内外面はナデ、口縁部内外面はヨコナデする。８は内唇部の粘土貼り付けにより「Ｔ」字状の口縁を呈し、口縁下には低い三角突帯が巡る。調整は７と同様で、外面には煤が付着する。９は無頸壺で、短く外反する口縁部内面は稜をなさない。口縁部はヨコナデ、体部はナデを加える。10は袋状口縁壺で、内面には緩い稜線が認められる。器面が磨滅する。11は器台で、内外面を指オサエで調整し、器面の凹凸が著しい。

ＳＤ017(第14図)　Ａ・Ｂ－１区に位置し、ＳＤ018に切られる。北側は調査区外に延びる。幅30cm、深さ10数cmを測る。

出土遺物(第13図12・13)　12は弥生土器甕で、逆「Ｌ」字状口縁を呈する。口縁部はヨコナデ、内面はナデを施す。外面は器面の磨滅により調整は不明である。13は壺もしくは甕の底部である。外面は刷毛目、内面はナデを行なう。他に弥生土器高坏等の細片が少量出土した。

ＳＤ018(第14図)　Ａ－１区で検出した。ＳＤ017を切り、並行する。幅20cm、深さ10cmの浅い溝である。北側は調査区外に位置する。



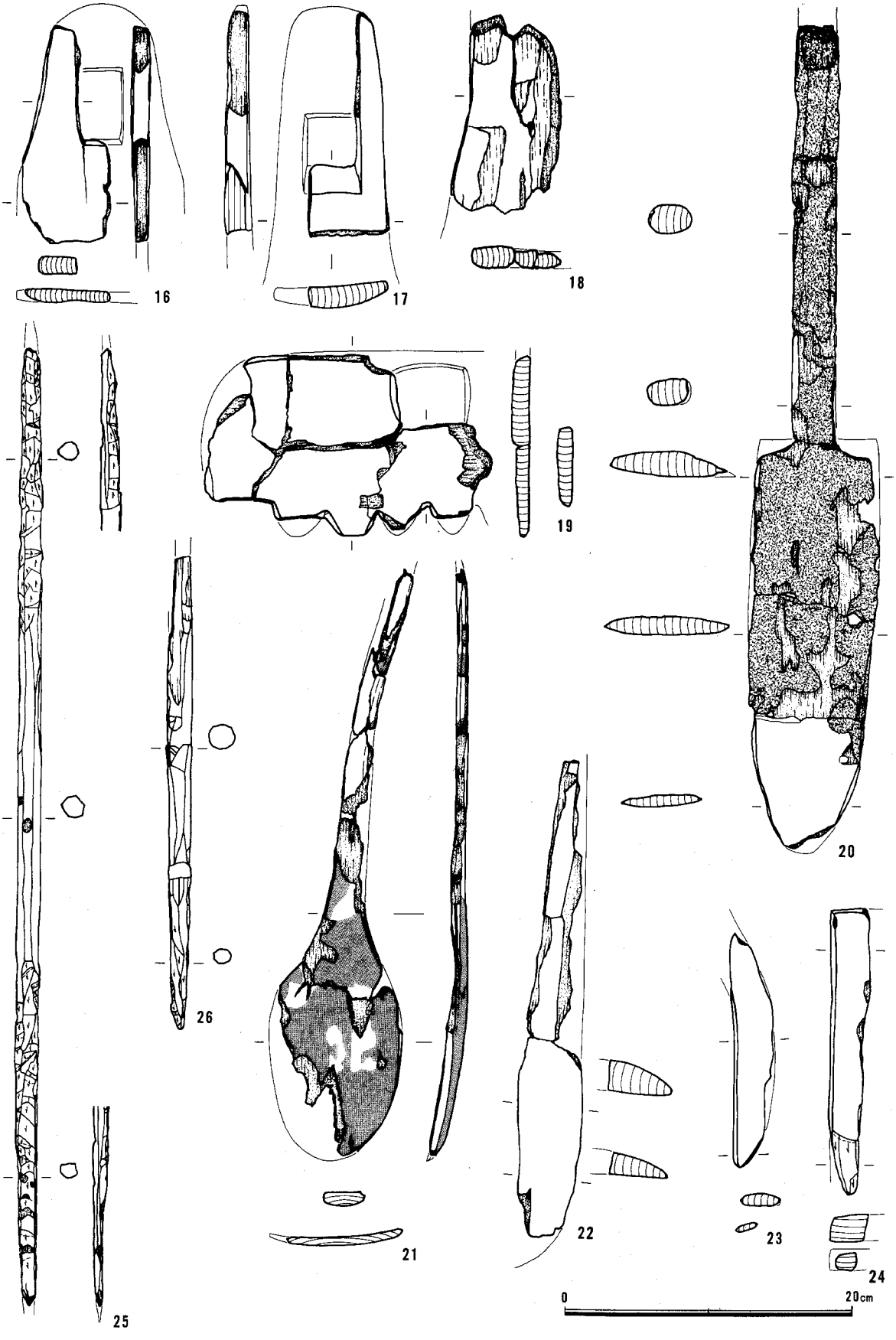
第14図　木器出土状況実測図(1/50)

出土遺物(第13図14・15)　14は逆「L」字状口縁の弥生土器甕で、口縁部はヨコナデ、外面は刷毛目、内面はナデを加える。外面には煤が付着する。15は器台裾部で、指オサエを施す。

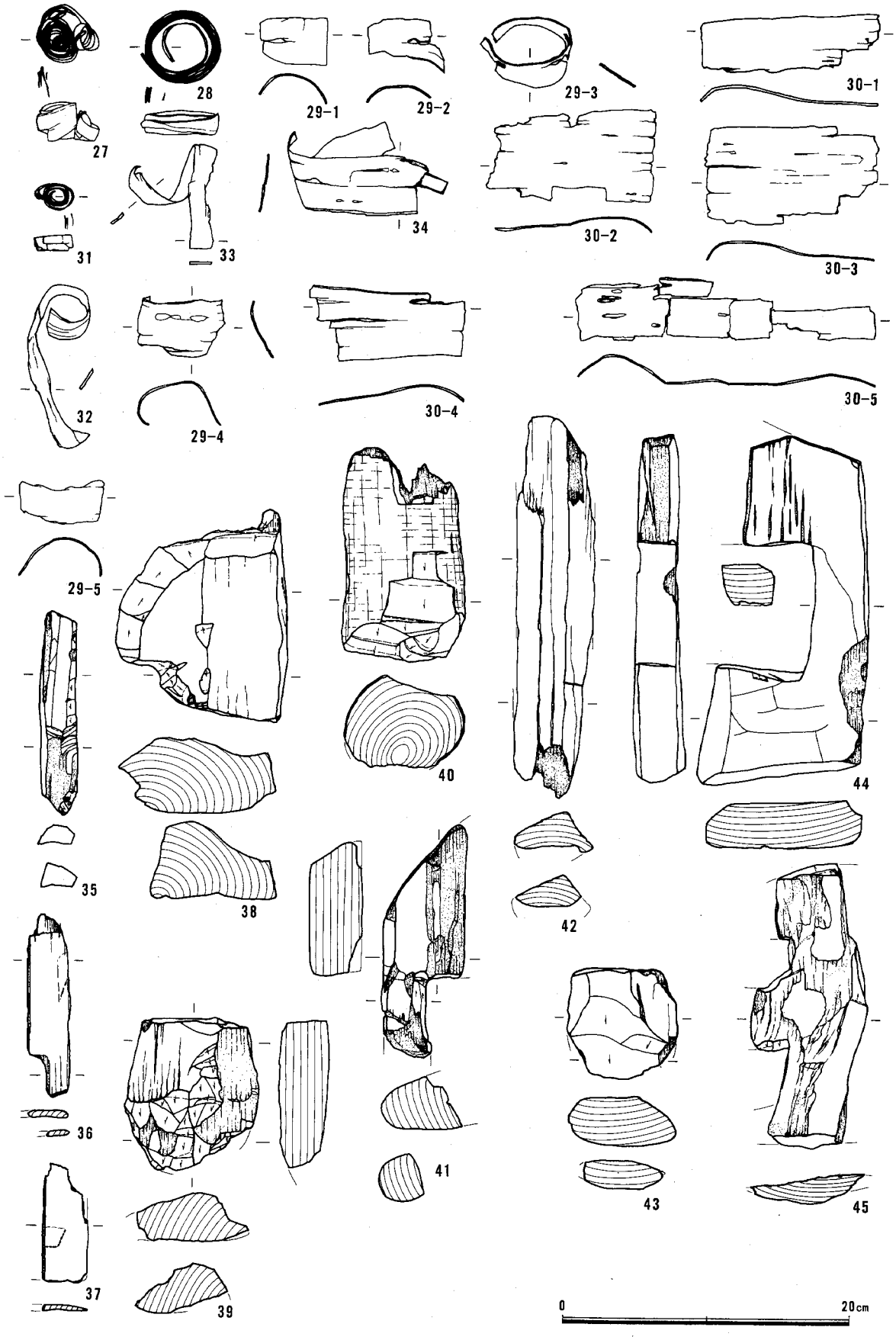
(3)その他の遺構と遺物

ここでは包含層上層・下層遺物及び5層群上面で検出した杭列について報告する。

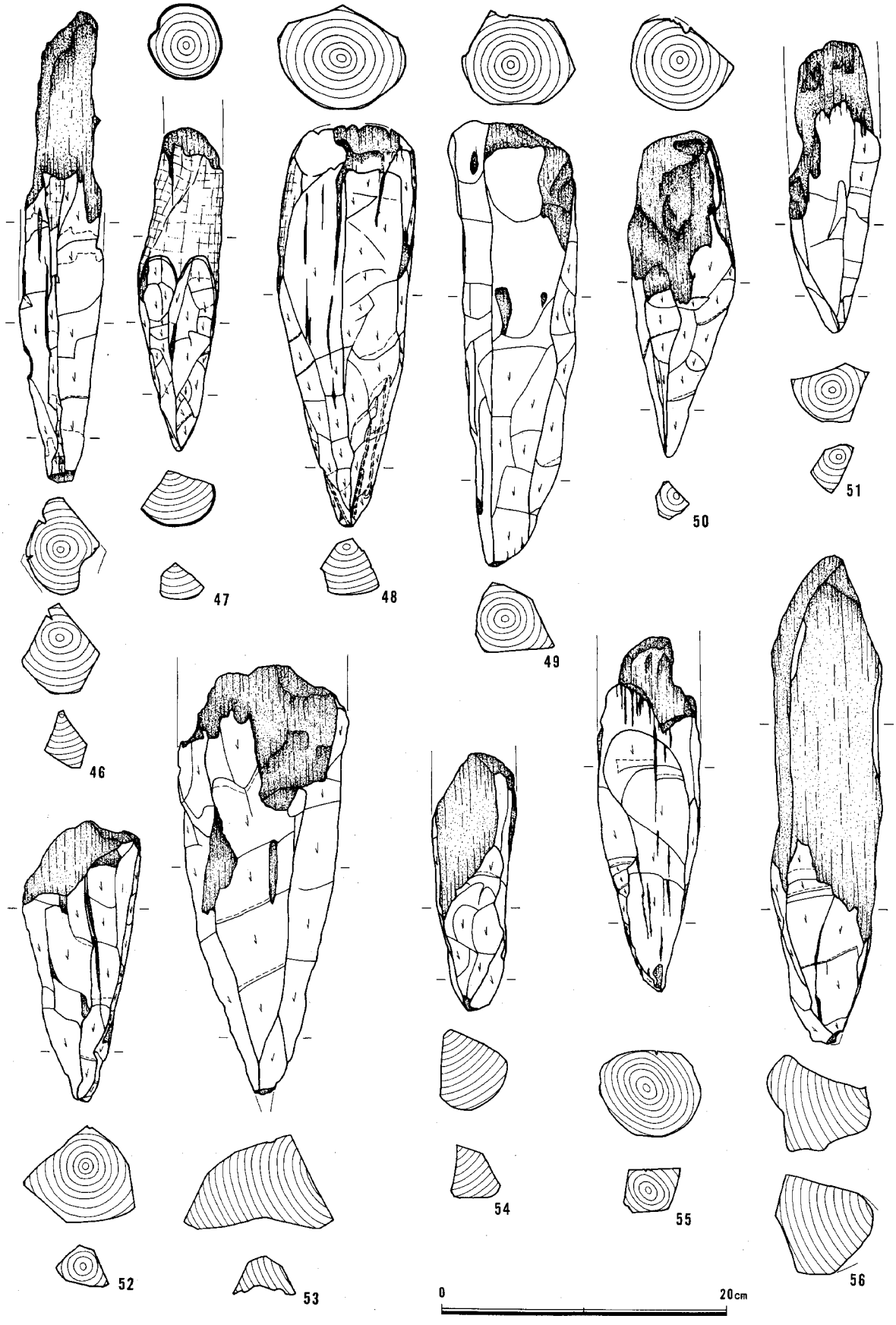
杭列(第14図X－Y)　B区の南北方向において確認した。南半部では略SD015に重複するが、北半部



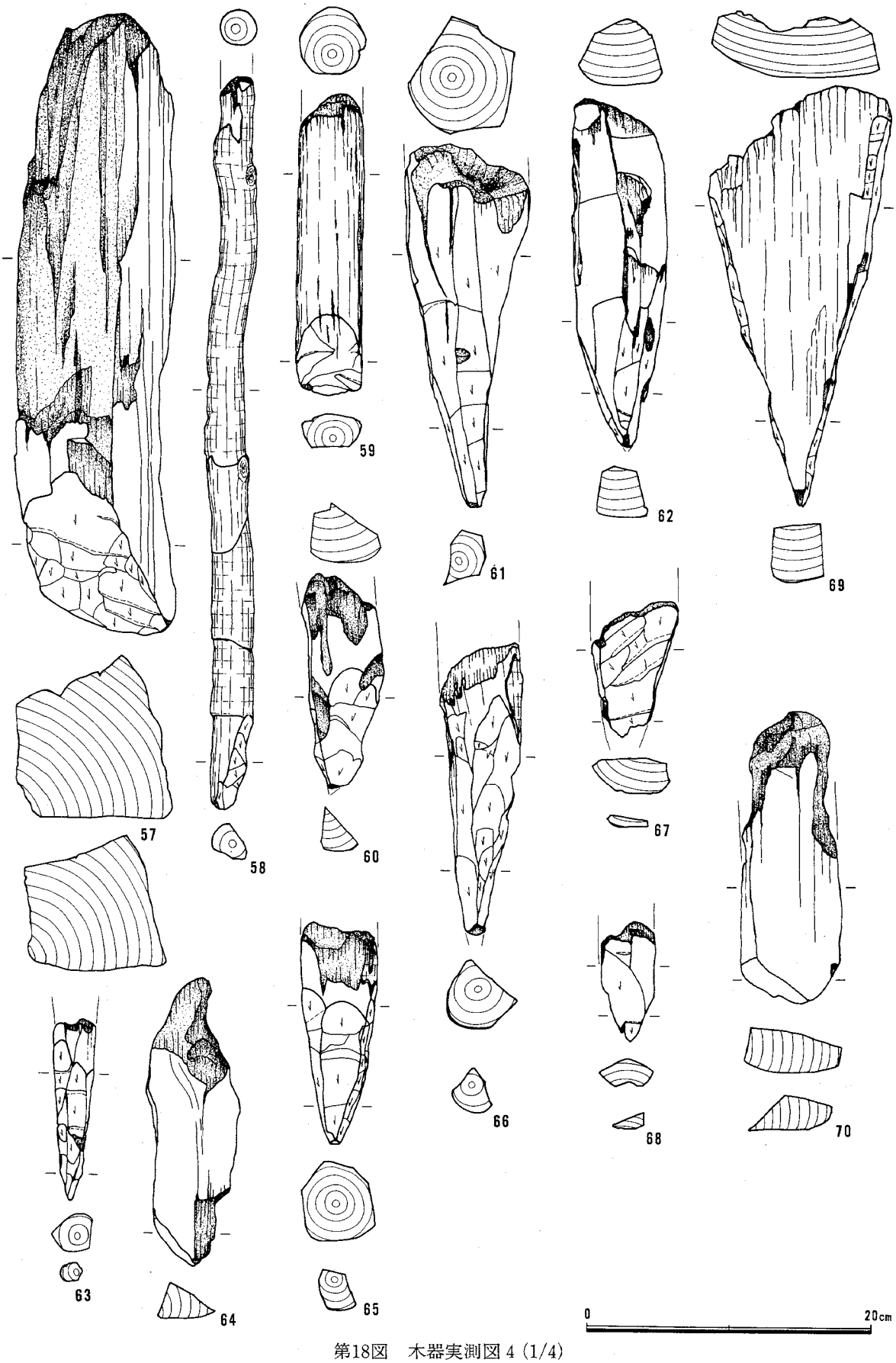
第15図　木器実測図１（1/4）



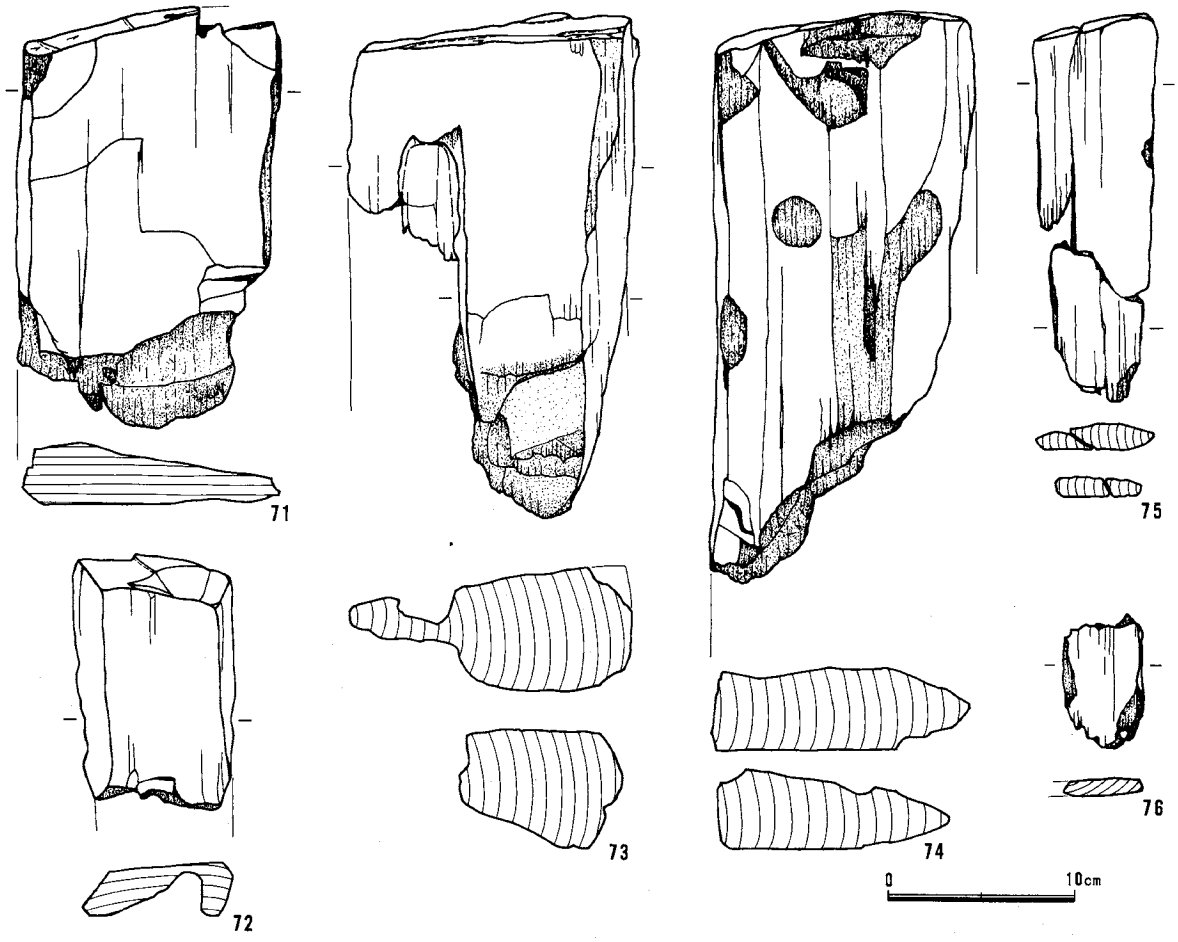
第16図　木器実測図２(1/4)



第17図　木器実測図３（1/4）



第18図　木器実測図 4 (1/4)



第19図　木器実測図５(1/4)

では西側にふれる。ＳＤ015に関連する施設の可能性もあるが、両遺構の明確な同時性についての確証はもち得なかった。北側部分は丸杭、角杭及び矢板が混在して不規則に散発しており、同一の杭列として把握することは不適当かもしれない。中央より南側では長さ約6mにわたって板杭が主体となる列が認められ、杭底面のレベルが略一致する。

木器(第15図～第19図、ただし38･39を除く)　ここでは上述した杭列及び５層群(包含層下層)で出土した木器についての記述を行なう。なお、木器以外の包含層下層遺物については後述する。

16～18･23はカシの柾目取り材を用いた鍬である。16～18は平鍬で、刃部を欠損する。16･17は方形の着柄孔が遺存する。23は二又鍬の刃部と考えられる。19はクヌギを用材とした杷で、鋸歯状を呈する刃部先端を欠失する。方形の着柄孔が認められる。20･22は平鋤で、カシの柾目取り材を使用する。20は一木造りの長柄鋤で、身先端を除いて炭化する。22は柄及び身の1/2を欠損する。21は板目取り材を用材とした杓子状木製品である。楕円形の身を有し、断面は緩く内湾する。表裏面に黒漆を塗布する。24は板材を転用した杭と考えられ、先端部に加工を加える。スギの板目取り材を用いる。25･26はイスノキの柾目取り材を用いた製品で刺突具と考えられる。両端部を丁寧に加工し、尖らせる 。25は残存長66.6cmを測る。27～34は桜皮である。27･28･31は巻束で出土した。なお、桜皮の遺物枝番号は同一出土位置で取り上げたが、直接の接合が不可能なものに付している。35～37･40～45･73～76は加工材である。41･73は建築部材で、73は溝状の枘孔を有する。44は組合せ部材と思われる。スギ材を使用するものが多い。46～72は杭である。先端部が大半を占める。58･59は棒杭で、58は樹皮が遺存する。69は矢板、70～72は板杭で、杭列の一部を図化した。

包含層上層遺物(第20図～第34図)

「３．1)調査の概要」で前述したように４ａ・４ｂ層中より出土した上層遺物についてここでは報告する。これらの層は谷部を埋める最上層の粘質土層で、東から西に傾斜をもち堆積する。厚さ20～30㎝で、北側では４ｂ層は確認されず、４ａ層が５層群に直接堆積する。遺物量はパンケース約80箱で、台地際のＣ－３区が15箱と若干多いものの、台地が大半を占めるＣ－１区を除いては、各グリッドともに10箱前後が出土しており、更に西側に包含層が拡がるものと予想される。出土土器は弥生中期中頃～後期前半が主体であるが、終末・古墳時代前期も少量含まれる。器種には甕、壺、鉢、高坏、蓋、器台がある。土器の他に出土遺物には土製品、漁撈具を中心とする石製品、銅鏃、袋状鉄斧、ガラス製玉類等がある。また、Ａ－３区では木製品に塗布したと考えられる漆膜が出土しており、これについては付論を参照されたい。

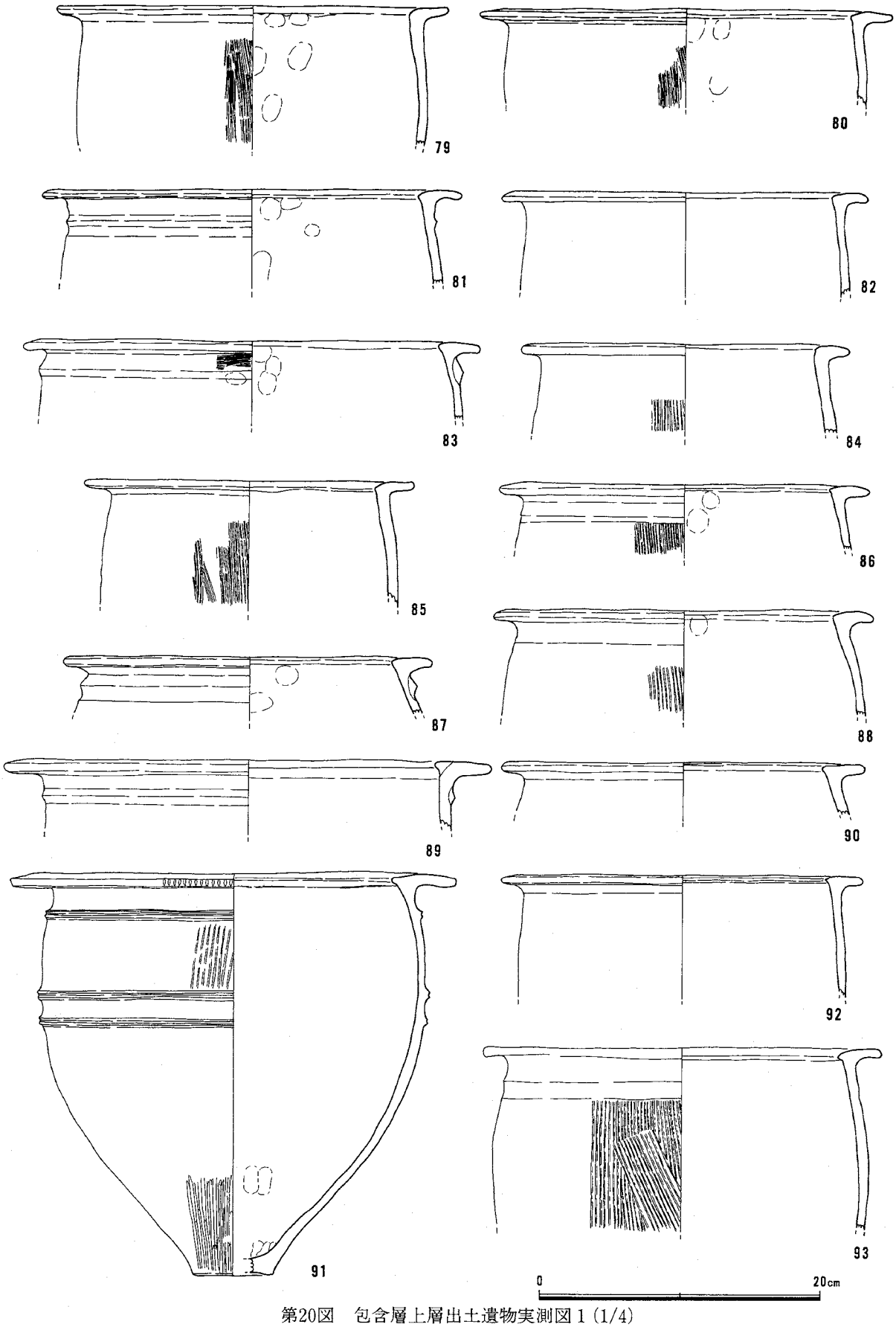
甕(第20図～第25図)

第20図・第21図は弥生時代中期に属すると考えられる甕である。体部外面は刷毛目、口縁部内外面をヨコナデ、体部内面をナデ調整する。口縁部の形態から大きく４類に分類できる。まず、逆「Ｌ」字口縁を有し、上面が水平になるもの(１群：79～88)、１群同様に上面が水平であるが、口縁部内面の粘土貼り付けあるいは、口縁部内面下の強いヨコナデによって内唇部が内側に張りだすもの(２群：89～92)、２群の口縁部が内傾気味になるもの(３群：93～98)、１群の口縁部が内傾気味になるもの(４群：99～103)に分かれる。１群では84は口縁基部が厚く、断面三角形に近いもので古式の様相を呈する。81･83･88は口縁下に鈍い三角突帯を貼り付ける。２群のうち91は口縁部が僅かに外傾し、口縁下・胴部に「Ｍ」字状突帯を巡らせる。胎土は精良で、赤色顔料を塗布する。３群では94･98の口縁内唇部の張り出しは弱い。93は外面に煤の付着が著しい。全体的に胴部の張りが大きい。４群では99が内傾の度合いが強く、他は内唇部のみが傾斜する。100は口縁下に鈍い三角突帯を貼付する。104～106は平底の底部を有し、105･106の内面の底部と体部の境界付近には指オサエが残る。

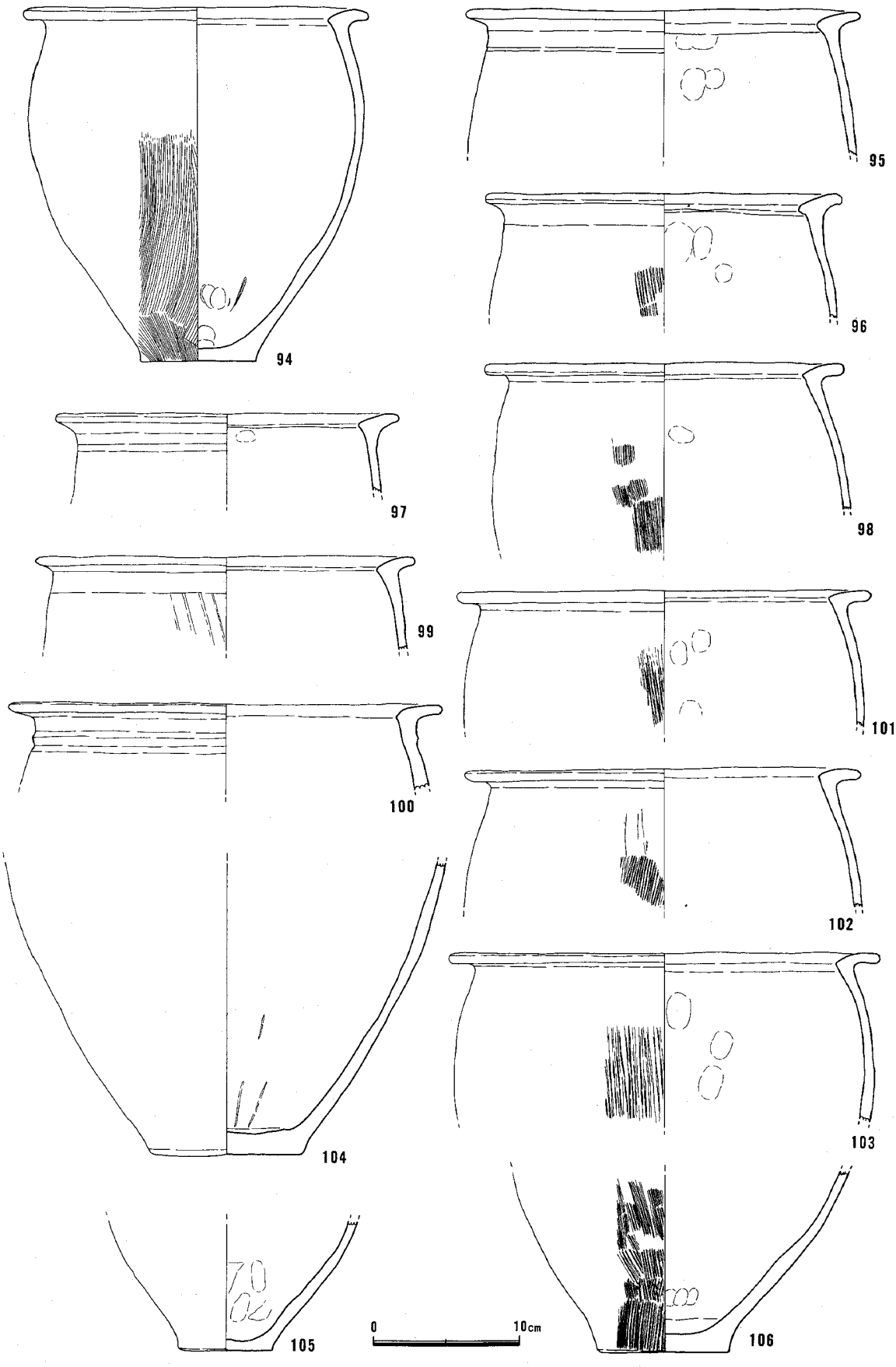
第22図～第25図は口縁部が「く」字状を呈する後期の甕で、調整は内面に刷毛目を使用するものが含まれる。第22図は口径が25㎝前後を測る中型の甕で胴部が張り気味のものである。このうち107～110は内面の稜が緩い。110は端部を肥厚させおさめる。111～114は内面の屈曲部が明瞭で、111･112は反り気味に外反する。113･114は口縁部が長く立ち上がる。

第23図115～第25図137は小型の甕で、第23図・第24図は口径が20㎝前後を測るものである。このうち第23図は遺存状況が良好なもので、115は体部外面及び内面の口縁部と屈曲部下に粗い刷毛目を施す。内面の稜はやや不明瞭である。116･119は115に形態が類似するが、116は内面の稜が比較的明瞭で、器高が低い。また、内面には板状工具によるナデを施す。119は胴の張りが弱く、屈曲部下には刷毛目は認められない。117は内面の稜が明瞭で、口縁部を長めにつくりだす。平底の底部から胴部へは外湾して移行する。118は長胴で、器面の凹凸が著しい。口縁部外面を除いて刷毛目を施す。120は胴部に張りがなく、体部の上位から底部にむかってすぼまる。第24図のうち121･122は口縁部内面の稜が明瞭で、122は口縁部の内面には刷毛目を施し、緩く窪む。123～131は内面の稜が緩く不明瞭なもので、123を除いて外傾の度合いが弱く、立ち上がり気味の口縁部を有し、端部は丸味をおびる。131の体部内面はヘラナデを施す。132～137は口径が15㎝前後を測る更に小型の甕である。132･133は精良な胎土を用い、内外面に赤色顔料の塗布が認められる。共に底部の立ち上がりが直線的である。137は口縁部は短く直立気味に立ち上がる。

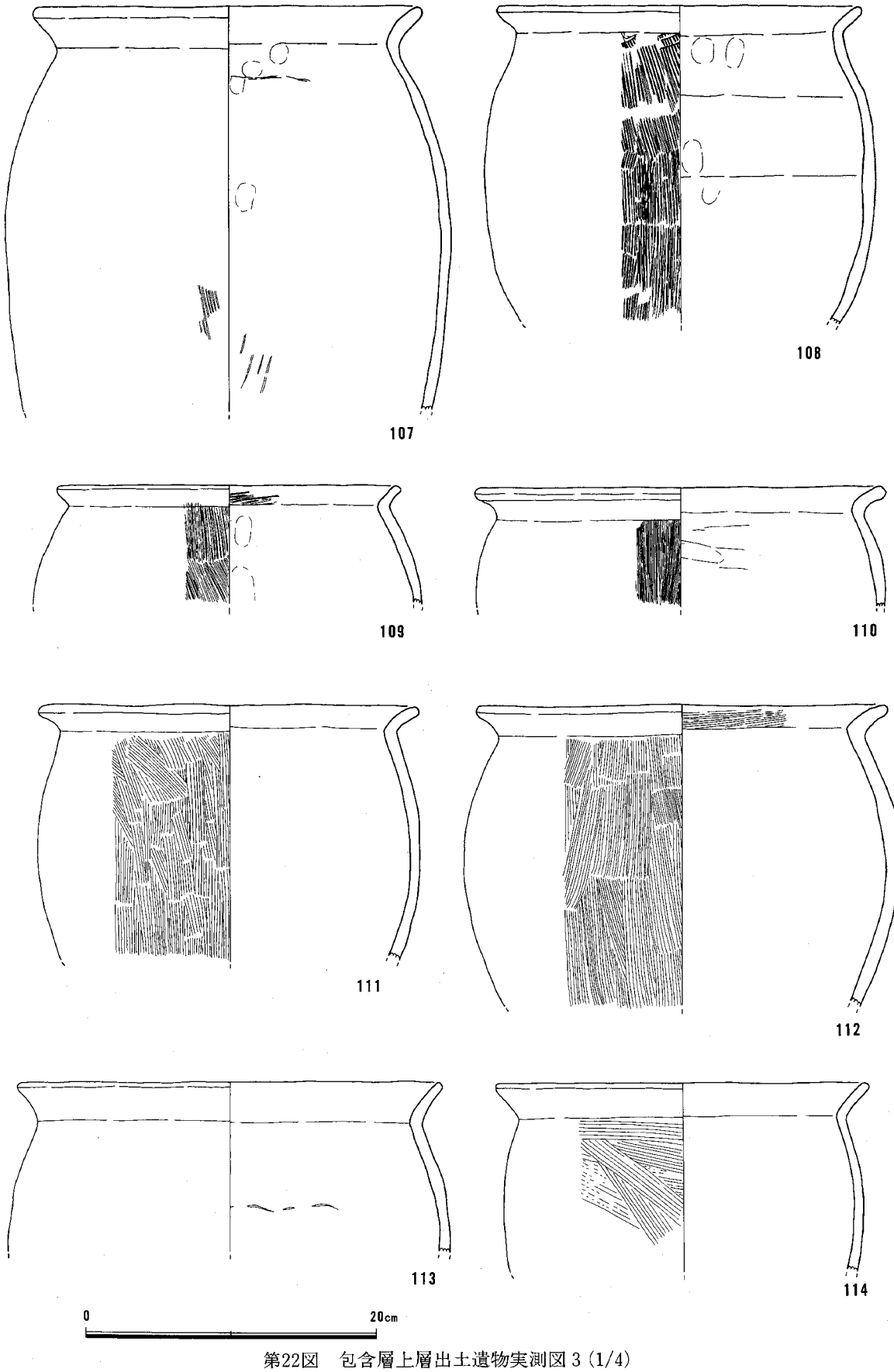
138～143は胴部に張りがなく、最大径を口縁部に有するもので、138～141は口径25～30㎝前後の中型甕である。138･139は内面の屈曲が緩く、139は138に比して外傾する。140は「コ」字形の突帯を頸



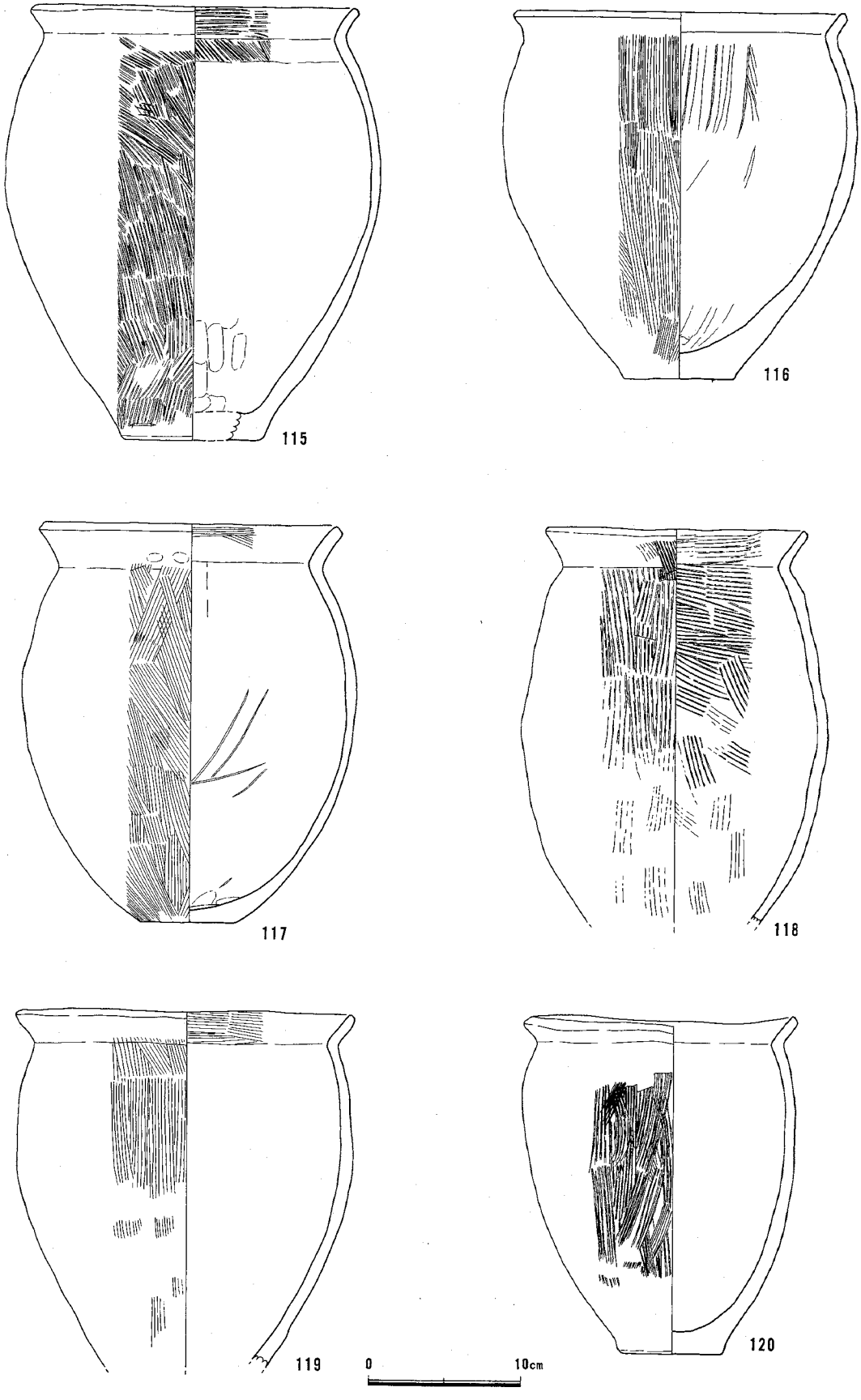
第20図　包含層上層出土遺物実測図１(1/4)



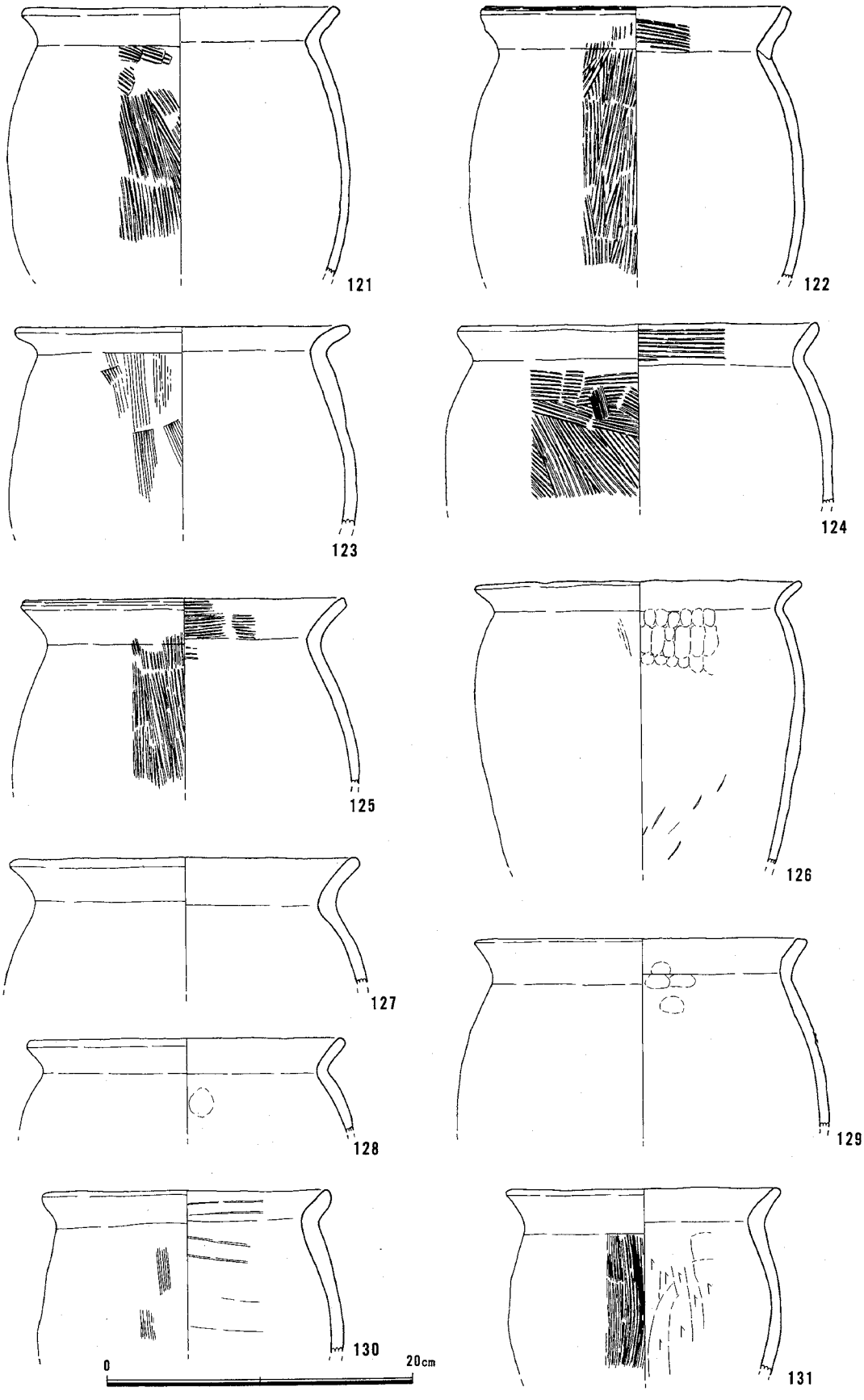
第21図　包含層上層出土遺物実測図２(1/4)



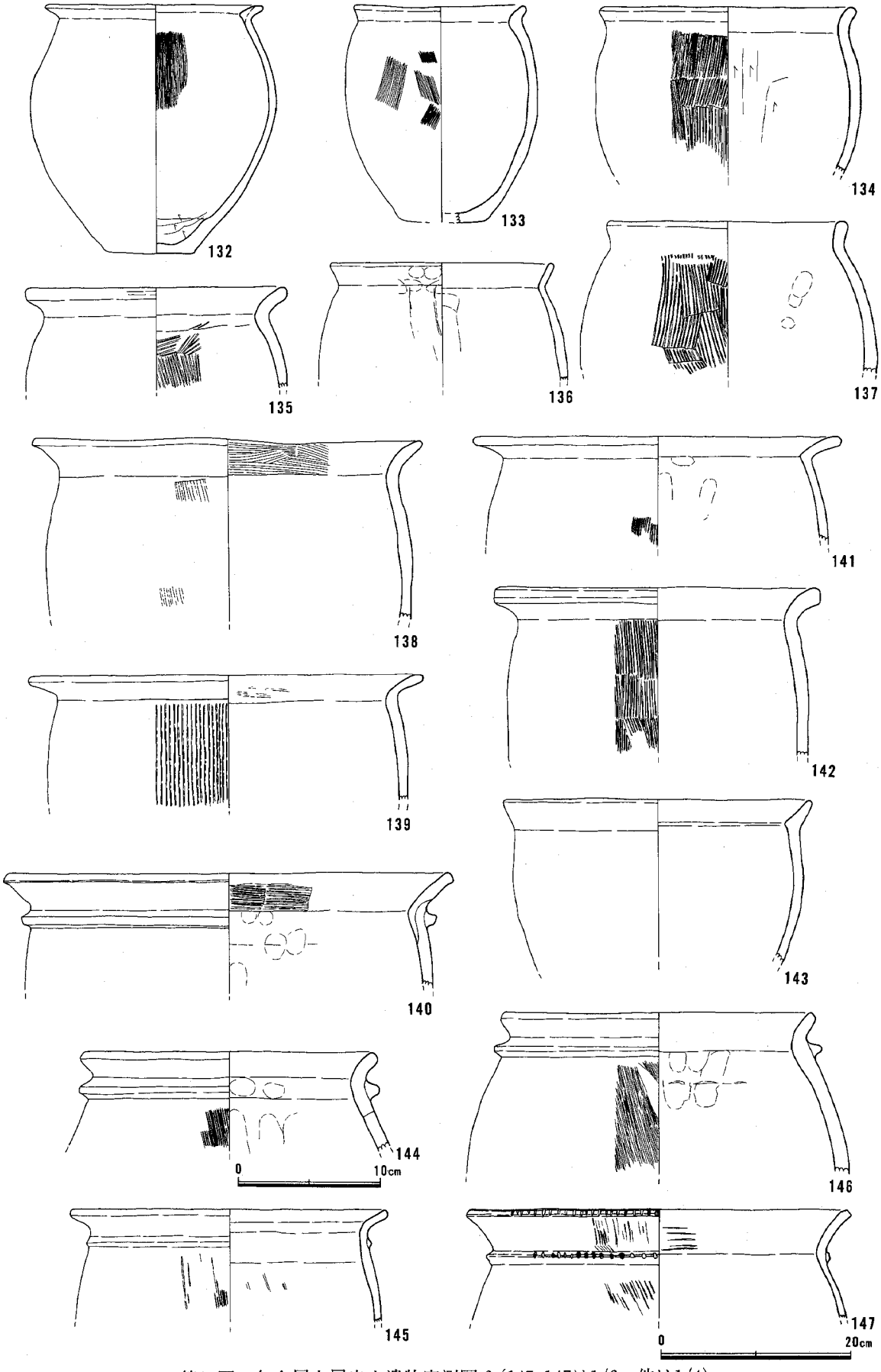
第22図　包含層上層出土遺物実測図３(1/4)



第23図　包含層上層出土遺物実測図4 (1/4)



第24図　包含層上層出土遺物実測図５（1/4）



第25図　包含層上層出土遺物実測図6（145・147は1/6、他は1/4）

部外面に有し、口縁端部は面をなす。142・143は口径20cm前後の小型のもので、142は反り気味に外反し、口縁端部が肥厚する。143は口縁部内面が窪み、上方に立ち上がるもので、端部は尖り気味に収め、内唇部は鈍く張り出す。

144～147は胴部が張り、口縁下に突帯を巡らせるものである。144・146 は「コ」字形、145・147は三角形の突帯を有する。147は復元口径41.0cmを測る大型甕で、口唇部及び突帯には板状工具による刻目を施す。

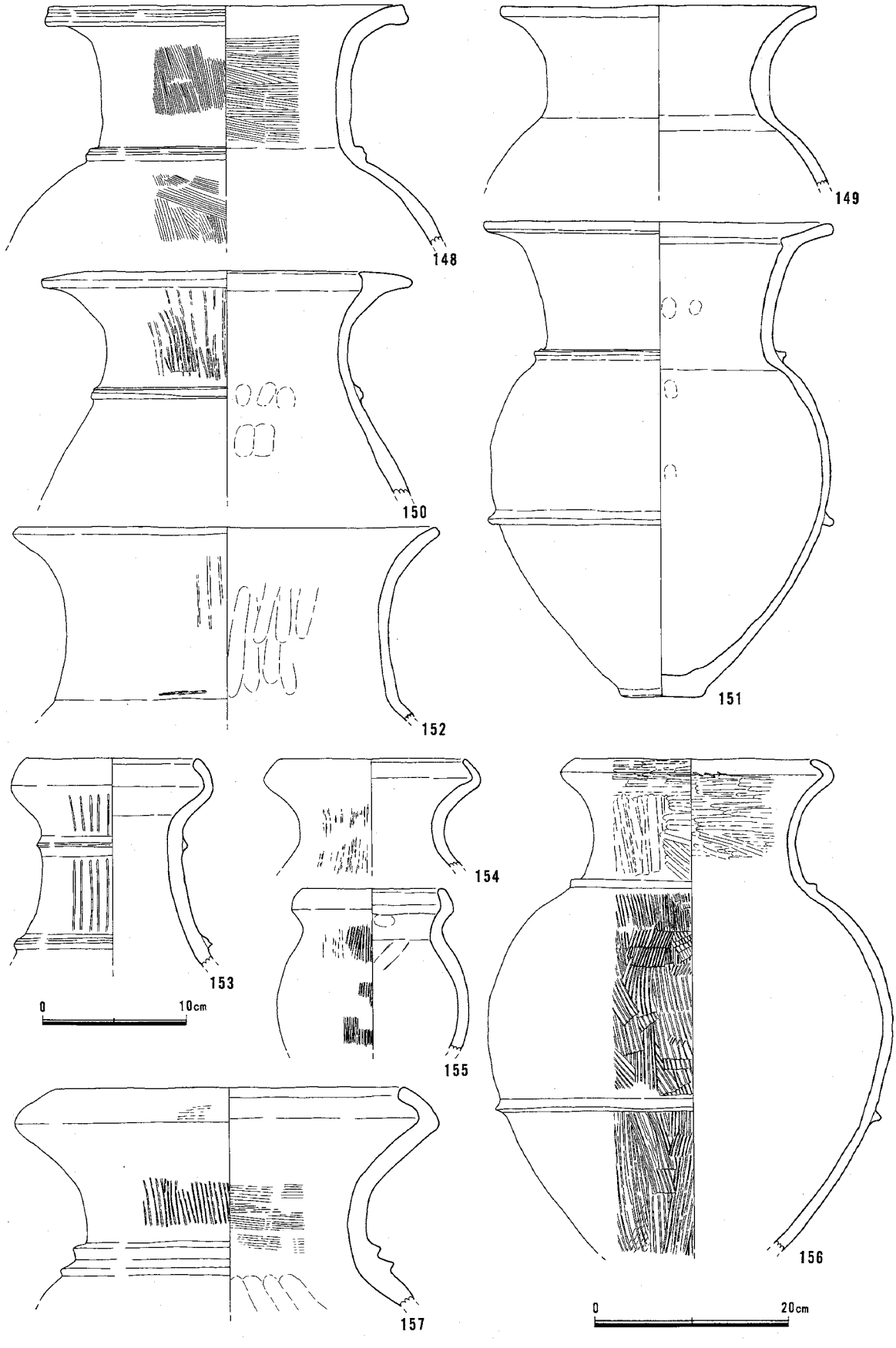
壺(第26図～第28図)

148～152は広口壺で、148・149・152は口縁部が素口縁をなす。148は頸部のつけねに鈍い「M」字状の突帯を貼り付け、頸部は直線的に立ち上がる。口唇部はヨコナデによって凹線状に窪む。体部の内外面は刷毛目調整する。149は頸部のつけねより大きく外反する。器面の磨滅が著しい。152は長めの頸部から外反する口縁部を有する。150・151は鋤先状の口縁部を呈するもので、150は口縁部が外傾する。頸部下には鈍い「M」字状突帯が巡り、肩に張りがなく胴部に移行する。突帯上位は刷毛目調整し、赤色顔料を塗布する。151頸部つけねから、直線的に外傾し、外反する口縁部にいたる。口縁部内面は内傾し、内唇部の張り出しは鈍い。頸部のつけねと胴部に「コ」字形の突帯を貼り付ける。復元口径37.2cm、器高49.5cmを測る。

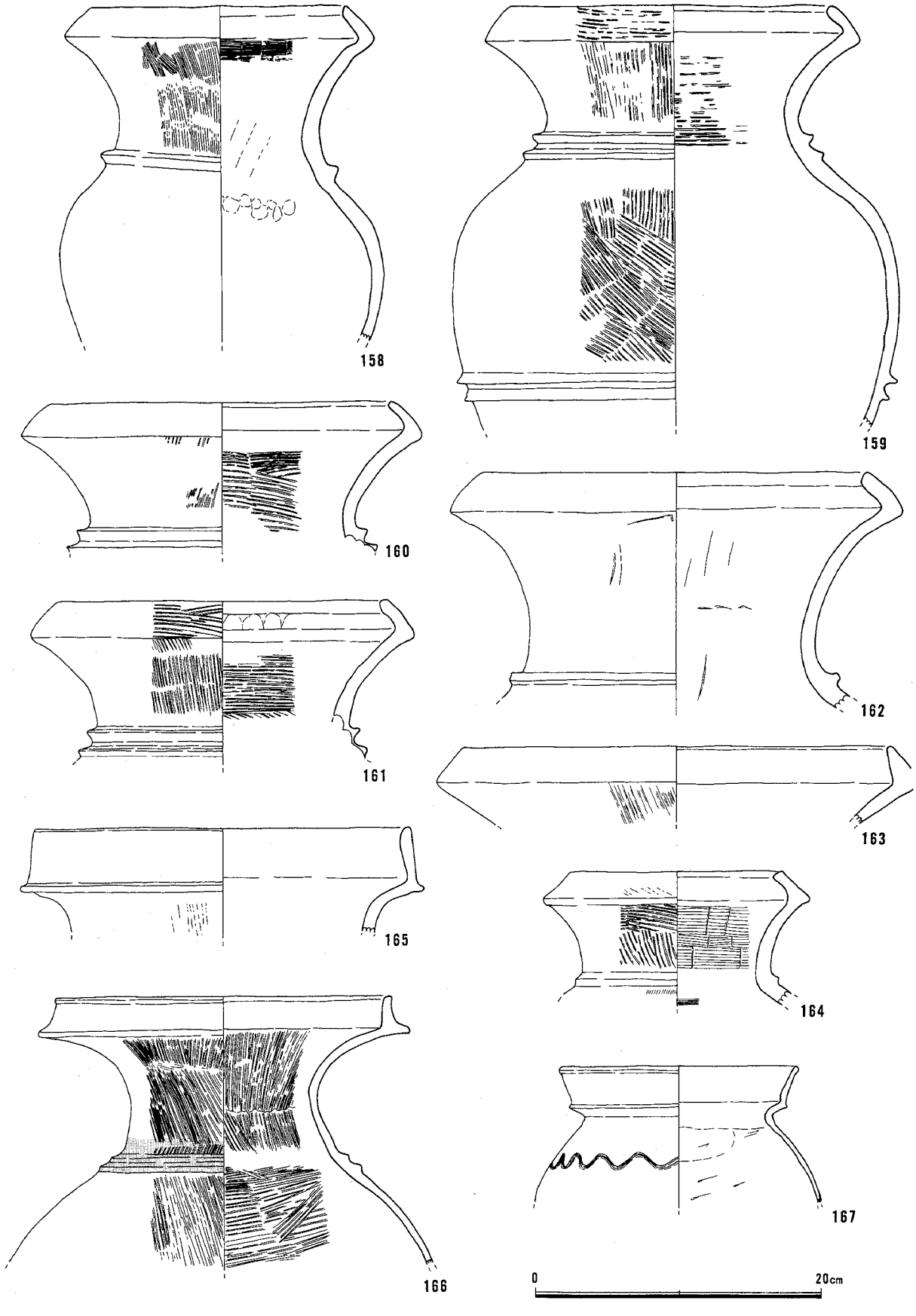
153～166は袋状もしくは複合口縁の壺である。153～155は口径10数cmの小型のもので、153は袋状口縁を有し、長頸で頸部の上位がしまる。頸部の上下に鈍い「M」字状突帯を貼り付け、暗文を施す。赤色顔料は器面の磨滅により僅かに残存する程度である。154は口縁部が逆「く」字状となるが、外面に稜は認められない。短い頸部には刷毛目を施し、赤色顔料を塗布する。155は緩い稜をもつ口縁部にしまりのない短頸を有する。外面には顔料を塗布する。

156～163は口縁部が逆「く」字状を呈する中型・大型の壺である。口縁部の上位が内湾気味に折れるものが多い。156は稜の緩い口縁部を呈し、頸部下と胴部中位よりやや下に三角突帯を巡らせる。口縁部及び頸部内外面はヘラ磨きし、赤色顔料を施す。胴部外面は刷毛目調整する。復元口径は25.0cmを測る。157は直立する短い頸部を有するもので、頸部下には2条の三角突帯が貼り付けられる。頸部内外面には刷毛目を施す。158はやや長めの頸部を有し、胴部は丸味を帯びる。口縁部の稜はやや鈍い。頸部のつけねには三角突帯を巡らせ、内外面は刷毛目調整する。159～161は短頸で、頸部のすぼまりが急である。つけねに三角突帯を2条貼り付ける。口縁部は明瞭な稜をなす。159は肩で緩く屈曲し、胴部にも2条の三角突帯が巡る。粗い刷毛目を外面、頸部内面に行い、外面には顔料が残る。160は頸部外面の刷毛目を板状の工具で粗くナデ消す。外面には赤色顔料を塗布する。161の口縁端部は肥厚して収める。条間の広い刷毛目で調整する。162は口径26.8cmを測り、緩く外反する頸部のつけねには「コ」字形の突帯が1条巡る。口縁端部には不明瞭ながら面をもつ。器面は風化する。163は口縁部上位が直線的に延びる。内外面共に器面が荒れる。復元口径30.0cmを測る。

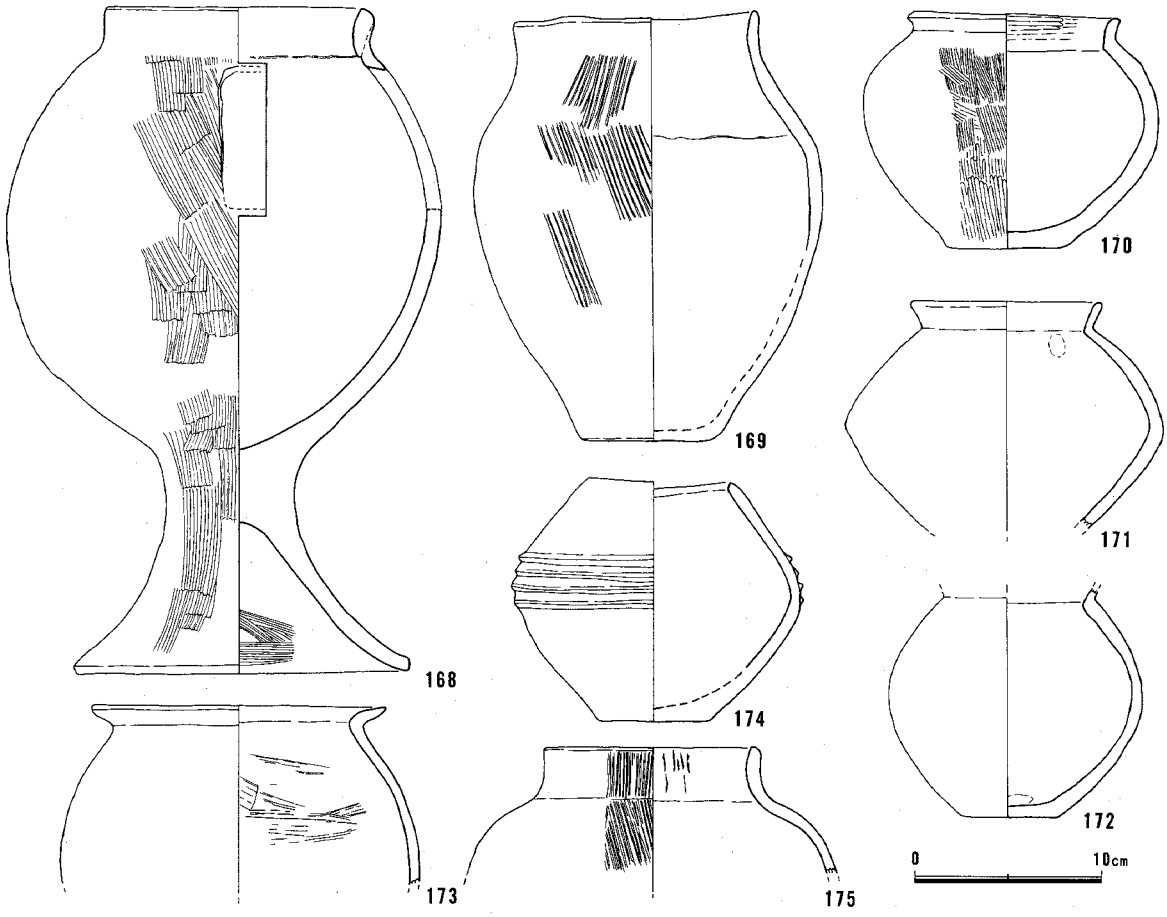
164～167は口縁の屈曲部が突出するもので、前述した複合口縁壺とは系譜を異にするものと考えられる。164は口縁上部の下端を突出させるように接合する。端部は面取りし、頸部下には三角突帯を巡らせる。調整は頸部外面では上位に粗い横方向の刷毛目を施した後に、下位の縦方向の刷毛目を行なう。口縁部の内外面及び突帯の上下はヨコナデ、頸部内面は外面と同一と考えられる工具での粗い刷毛目である。肩部内面には細かい横方向の刷毛目を用いる。165は外反する口縁下部の端部にやや内傾する上部をのせる。端部は肥厚し、僅かに外反する。内外面ヨコナデ調整を施す。166は直線的に内傾する頸部に大きく外反する口縁部を有する。口縁下部の内側に直立気味の上部をのせ、端部を短く外反させる。上面はやや内傾気味の面をなす。頸部下には低い三角突帯が2条巡り、帯状に水銀朱を用



第26図　包含層上層出土遺物実測図7（151・156は1/6、他は1/4）



第27図　包含層上層出土遺物実測図８(1/4)



第28図　包含層上層出土遺物実測図９(1/4)

いた顔料(付論参照)が明瞭に塗布される。また、顔料は一部頸部上位にも認められる。調整は口縁部内外面及び突帯部の内外面がヨコナデ、他は刷毛目を施す。胴部内面は横方向、他は縦あるいは斜方向である。色調は他の個体と異なり、内外面に褐色を呈する。復元口径は23.4cmを測る。

167は山陰系の二重口縁壺である。外傾する口縁上部をもち、端部は丸く摘まみ出す。肩部には櫛状工具による波状文が施文される。体部内面はヘラ削りし、器壁を薄く仕上げる。

168は脚付直口壺である。裾広がりの脚に体部が丸味を帯びる直口の壺をのせる。口縁部は短く僅かに外傾する。胴部の上位に方形を呈すると考えられる透かし窓が焼成前に開けられる。外面は刷毛目、口縁部内外面はヨコナデし、内面はナデる。外面の口縁部から体部の上半にかけて赤色顔料が塗布される。第1次調査ＳＤ－01で類例の出土がある。復元口径24.0cm、器高35.6cmを測る。

169･175は直口壺である。共に短い口縁部を有するが、169はナデ肩の体部で平底の底部に向かって直線的にすぼまる。器面は荒れるが、外面には粗い刷毛目が残る。胎土には砂粒が目立つ。175は肩が張る器形である。外面は口縁端部まで刷毛目を施し、内面にはシボリ痕が残る。

170～174は無頸壺である。174を除いて「く」字状に短く外反する口縁部を有する。171は直立気味の口縁部に最大径を胴部の上位に有する体部が付く。外面は刷毛目調整を行い、口縁部内面まで赤色顔料を塗布する。171は胴部の中位で屈曲し、算盤玉状の体部を呈する。器面が磨滅するが、外面には顔料を塗布した痕跡が伺える。172は底部から直線的に球形の体部に移行する。173は外面から口縁部内面にかけて赤色顔料が残る。内面は刷毛目を粗くナデ消す。口縁部は内傾気味の逆「Ｌ」字状とな

る。174は口縁部が外反せず素口縁となる。胴部には4条の三角突帯が巡る。突帯下は板状工具によるナデ、その上位から口縁部内面までヨコナデ、内面はナデ調整する。

鉢(第29図・第30図188～194)

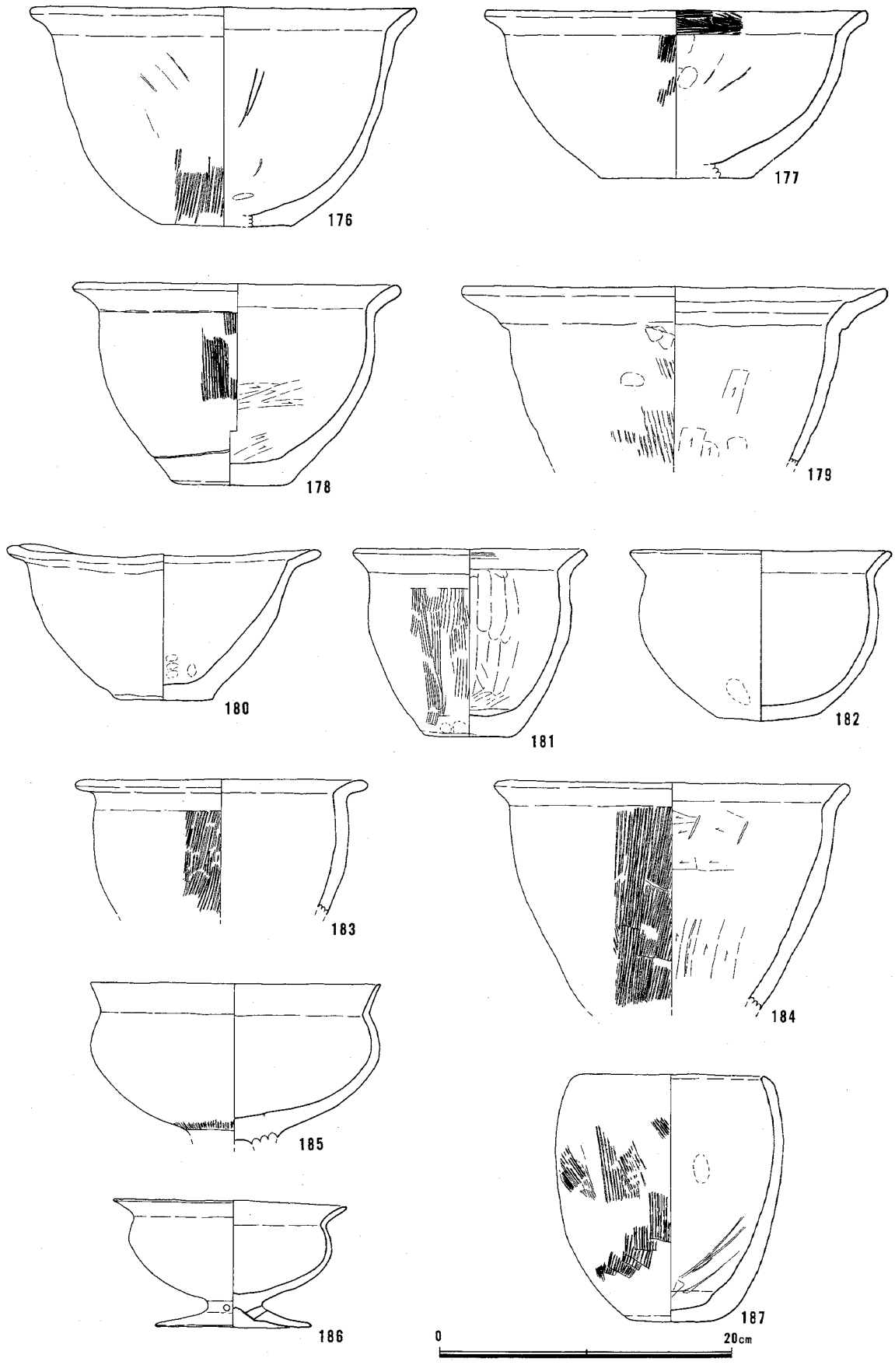
176～184は口縁部を「く」字状に外反させる。176は器面が荒れるが、外面は刷毛目、内面はヘラナデ、口縁部内外面はヨコナデが認められる。177は176に口縁部の形態が類似するが、器高が低く、大きく開く器形である。口縁部内面に刷毛目を用い、内面はヘラナデを施す。178は底部から体部へ反り気味に移行し、体部は丸味を帯びる。体部外面の下位には接合痕が残る。器面が磨滅するが、外面には刷毛目、内面にはヘラナデが残る。179は口縁部が長めで大きく開き、内面は強いヨコナデによって凹凸が生じる。外面は器面の剥落がすすむが、粗い刷毛目が部分的に認められる。内面はヘラナデする。180～183は小型の鉢である。180の口縁部は「L」字状の口縁部が内傾気味になったもので、内面の屈曲は明瞭である。底部から体部へは刷毛目調整によって反り気味となる。内外面に粗いナデを施す。器壁は厚手である。181は口径に比して器高がやや高めの器形を呈するもので、外面は縦方向の刷毛目、内面は指ナデ、口縁部内外面はヨコナデを施す。外器面はワレが目立つ。182はやや不安定な平底を有し、体部は丸味を帯びる。器面の磨滅が著しい。183は口縁部内面の稜が緩く、端部を丸く収める。口縁部内外面をヨコナデ、外面は刷毛目、内面はナデ調整する。外面は口縁端部付近まで煤の付着が認められる。184は口径に比して器高が高めで、甕に近い器形である。口縁部の屈曲は緩く、体部は直線的である。外面は刷毛目、内面はヘラナデ、口縁部内外面はヨコナデを施す。体部の中位にかけて器壁が厚手となる。

185・186は脚付きの鉢である。共に鉢部は器高が浅く、胴部最大径を上位に有する偏球状を呈する。また、器壁を薄く仕上げる。185は脚部の大半を欠失し、口縁部は直立気味に屈曲させる。脚部との接合部に刷毛目を僅かに残す程度で、器面が著しく荒れる。胎土には砂粒を多量に含む。186は裾の大きく広がる低い脚部を有し、口縁部は強く外傾する。鉢と脚部の境界に外面より孔を焼成前に3つ穿ち、脚部内面には粘土が隆起する。器面は剥落により調整は不明瞭である。精良な胎土を用いる。

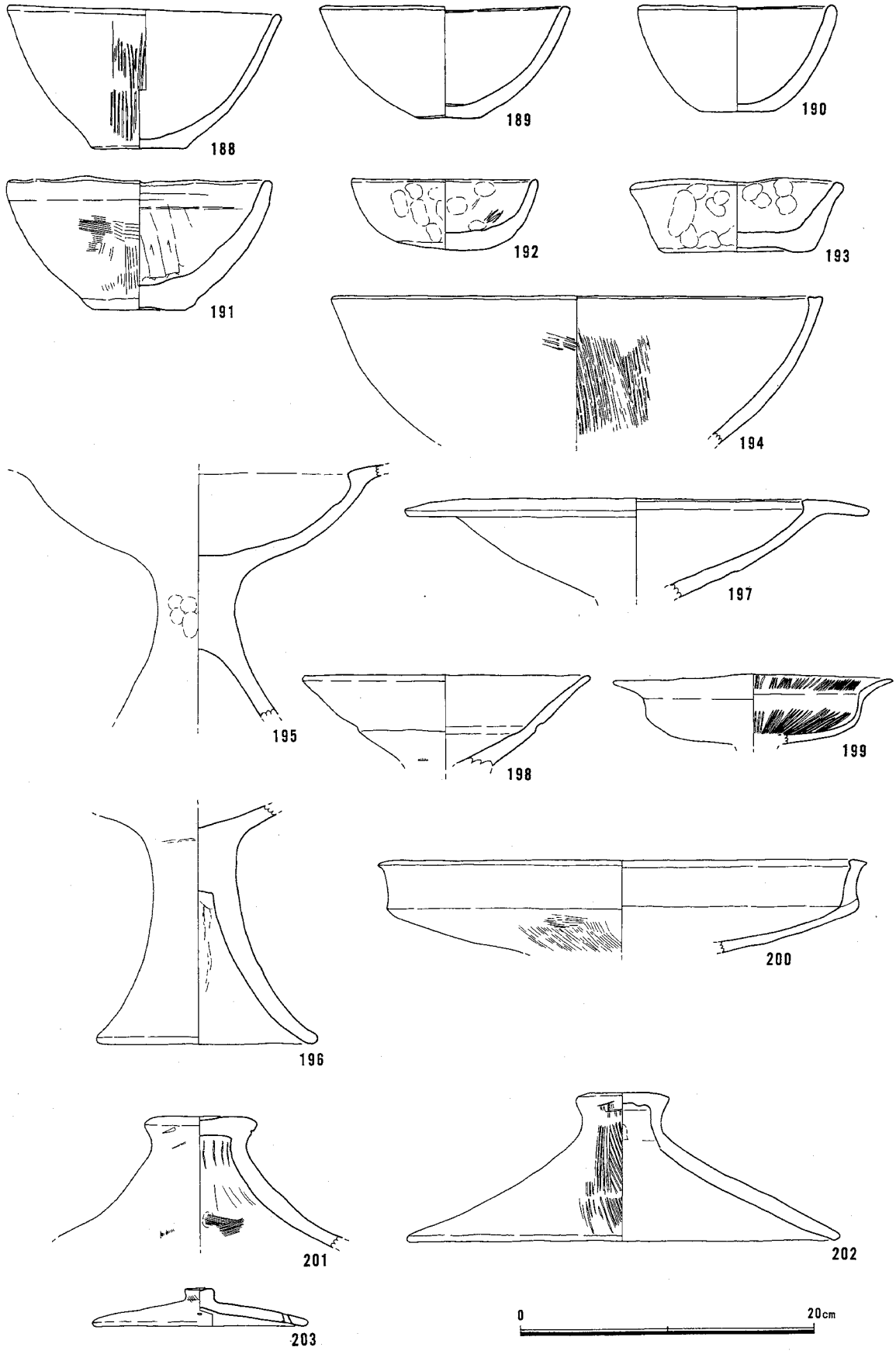
187～194は素口縁を呈するものである。187は口径より器高が高い深鉢状となるものである。底部はやや不安定な平底から内湾して収める口縁部へと体部が丸味をもって延びる。外面は刷毛目、口縁部内外面をヨコナデ、内面の下半部にはヘラナデによる工具痕が残る。内底部は指ナデによって窪む。188～191は平底の底部から口縁部へ大きく開くものである。188は外面は刷毛目、内面はナデて、内外面には赤色顔料を塗布する。189は小振りの底部を有し、体部へは直線的に移行する。器面は磨滅する。190は深みのある器形で、外方への開きが緩い。器面が荒れる。191は器壁が厚く、重量感がある。外底部はつくりがやや粗雑で、粗いナデにより凹凸が生じる。外面は体部下半が縦方向、上半が横方向の刷毛目、口縁部内外面はヨコナデし、内面はヘラナデする。内底部は指オサエで調整する。192・193は坏状を呈する。192は丸味のある底部を有し、指オサエが残る。193は上げ底状の底部から直線的に体部が開く。粗いつくりで、全面を指オサエし、器面の凹凸が目立つ。194は復元口径33.4cmを測る大型の鉢で、口縁部上面はヨコナデによって窪む。外面は器面が荒れるが、内面には刷毛目が残る。

高坏(第30図195～200)

195・197は鋤先状の口縁部を呈するものである。195は体部に丸味があり、口縁部は内傾気味となる。内唇部の張り出しは鈍い。器面は風化が著しいものの、内面には赤色顔料が残る。197は外唇部が外傾し、体部は直線的である。器面が荒れ、調整は不明である。僅かに赤色顔料が残る。196は長脚の脚部のみが遺存する。内面にはシボリ痕が認められる。198は屈曲部が沈線状を呈し、外面には刷毛目が残る。坏部は直線的に広がる。199は丸味のある体部に反り気味に長く外反する口縁部が付く。内面には



第29図　包含層上層出土遺物実測図10(1/4)



第30図　包含層上層出土遺物実測図11(1/4)

放射状に暗文風のヘラ磨きを施す。200は中部瀬戸内系と考えられるもので、復元口径31.6cmを測る。坏部の中位で屈曲し、口縁部は反り気味に上方に立ち上がる。端部は面を形成し、内外面を鈍くつまみ出す。外面の下半に刷毛目、口縁部内外をヨコナデするが、他は器面が荒れる。

蓋(第30図201～203)

201・202は甕の蓋で、天井部につまみを有する。201は外面はナデ、内面は天井部にシボリ痕を残し、下半は刷毛目を粗くナデ消す。202は外面刷毛目、内面ナデ調整する。復元口径29.4cmを測る。203は無頸壺の蓋で、笠状を呈し小さなつまみをもつ。焼成前に穿孔を施し、外面には赤色顔料が塗布される。内外面ナデ調整する。

器台(第31図・第32図224～232)

232を除いては円筒形の器台で、このうち204～220は上下対称にちかい器形を呈するものである。204・205・217は全容が判明するもので、204・205の器高は共に17.0cmを測る。204の外面は刷毛目及び指オサエ、内面はシボリ、指オサエする。205は裾部内面に刷毛目を施し、一部をナデ消す。217は器高11.1cmを測る小型の器台で、内外面に指オサエする。受部は内面に鈍い稜を有し、屈曲する。206～211、214～216、218～220は受部を欠失する。調整は刷毛目、指オサエを基本とする。このうち207は裾があまり広がらず、円筒形を呈する。218～220は裾端部の器壁が厚く、219・220は接地面を広く有する。

221～231は受部が明瞭で、上位に屈曲部を有する。221は直線的な脚部を有するもので、外面には板状工具による斜方向のオサエ、あるいは叩きと思われる痕跡が認められる。内面には屈曲部下にシボリ、両端部に指オサエを施す。222は脚部が内湾気味のカーブを描く。調整は221に類似する。223は内外面に屈曲部が緩い。外面には縦方向の刷毛目、内面の脚部には刷毛目、ヘラナデを施す。224は屈曲部のすぼまりが強く、大きく開脚する。225・226は外器面が磨滅する。内面の調整は225はシボリ、226はヘラナデである。227・228は受部を欠失し、227の外面は指ナデ、刷毛目、内面は刷毛目をナデ消す。228は外面及び裾端部に叩きを施し、外面は縦方向の刷毛目を加える。内面は下半部に横方向の刷毛目調整する。229は器高11.5cmを測る小型のもので、裾端部は丁寧に面取りし、接地面を有する。外面は221と同様の調整を施し、内面にはシボリ痕が残る。230・231は受部のみが遺存し、類似した口唇部を有する。230は口唇部に板状工具による刻目を配し、外面はヘラナデを施す。231は同様の刻目を有し、外面には凹凸の明瞭な叩き痕が残る。

232は沓形器台と称されるもので、脚部及び上面の突起を欠失する。上面は丁寧にナデを施し、中央部外面から焼成前に孔を穿つ。外面は刷毛目、内面は指オサエで調整する。

ミニチュア土器(第32図233)

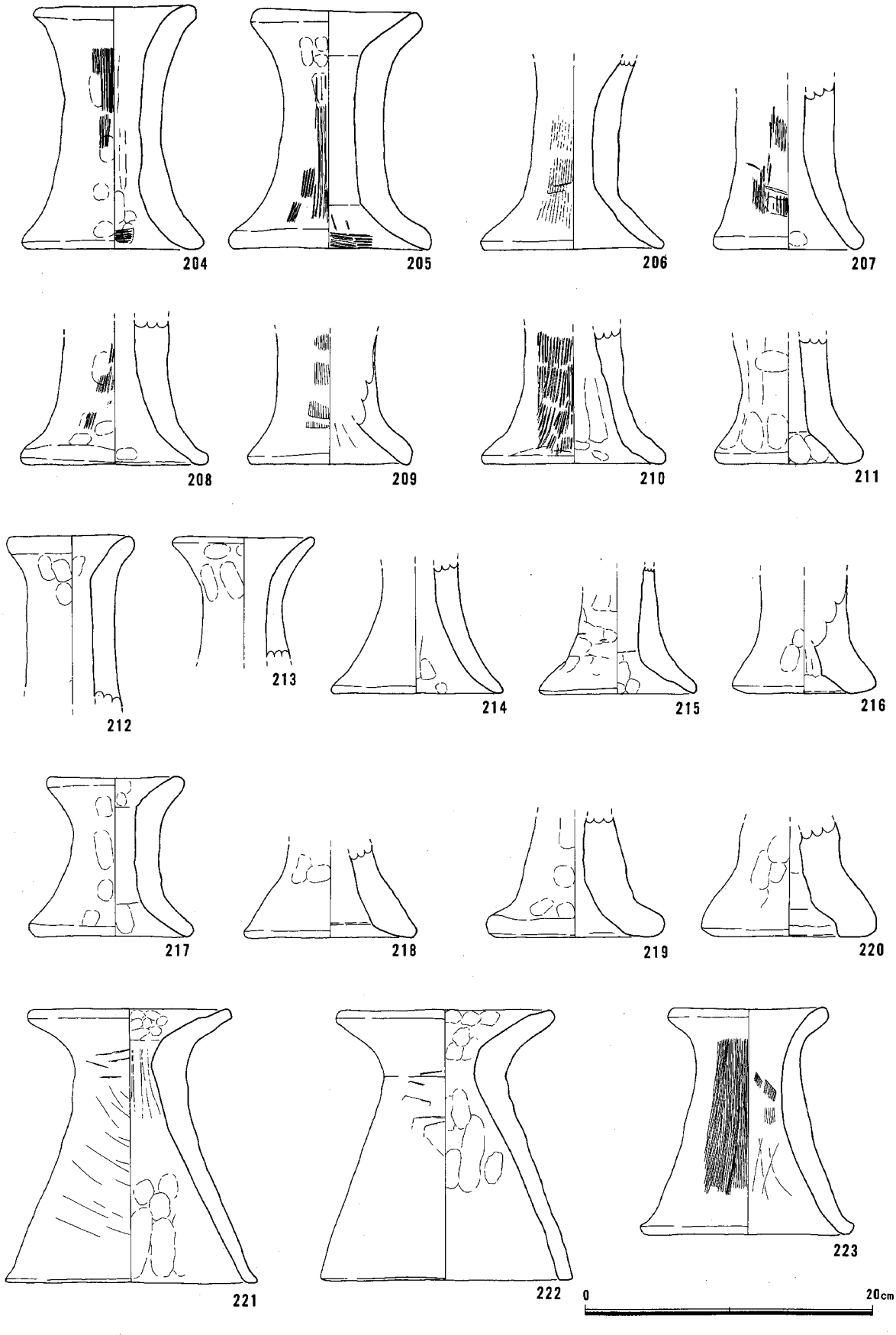
鉢形を呈するもので、器高6.2cmを測る。安定した平底を有し、内面はヘラナデ、外面はナデを施す。凹凸がなく丁寧なつくりである。

手捏ね土器(第32図234～242)

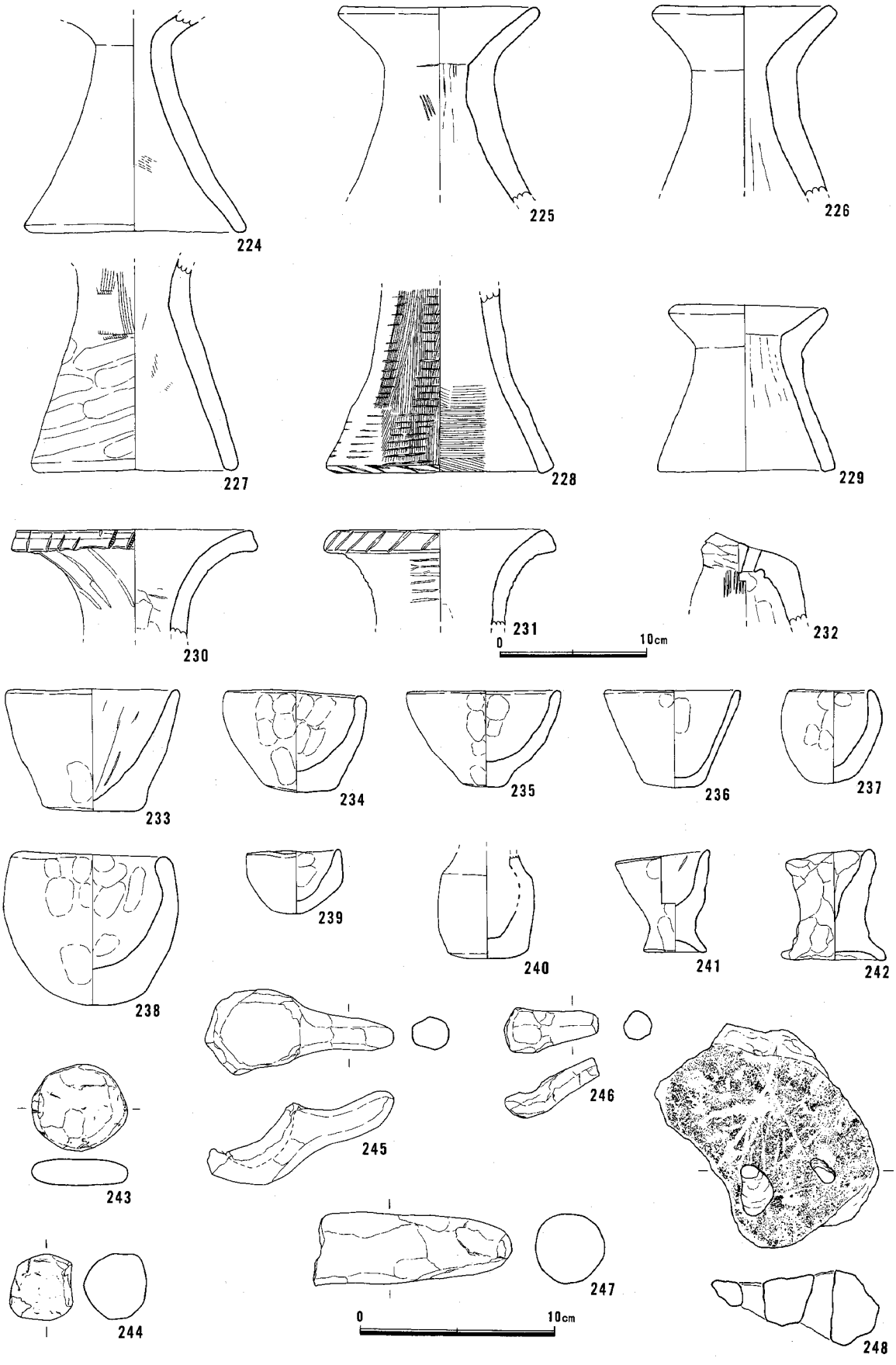
内外面に指オサエが残るもので、全体的につくりが粗雑である。234～236は鉢形を呈し、234は口縁部を内湾気味に収め、底部はやや不安定な平底である。235は小振りな底部から体部が上方に開く。236は比較的つくりが丁寧で、器壁の厚さが一定している。237～239は椀形を呈するもので、不安定な丸底状の底部をつくり出す。240は頸部上位を欠失する。肩で緩く屈曲し、平底の底部へ至る。241・242は脚付き鉢あるいは器台を模したものであろう。指オサエによる凹凸が著しい。

土製品(第32図243～248・第34図265)

243は円盤形土製品で、ナデて仕上げる。244は土弾で、不整な球形をなす。器面が磨滅する。245・246は杓子形の土製品で、共に直線的な柄を有する。指オサエで調整する。247は棒状を呈し、端部は



第31図　包含層上層出土遺物実測図12(1/4)



第32図　包含層上層出土遺物実測図13(224～232は1/4、他は1/3)

欠損する。指オサエ、ナデを施す。248は板状の不明土製品で、上面に植物繊維の痕跡が残り、粗雑な穿孔を2個有する。胎土には砂粒を多量に含む。265は球状土錘で、孔は隅丸方形を呈する。重量は13.3gを測る。

石器(第33図)

249・250は凹石である。249は玄武岩製で、表裏面の中央部に細かい敲打痕が認められ、浅く窪む。重量は991.3gを測る。250は花崗岩を用い、表裏面に深い窪みを有する。251は玄武岩製の石皿で、大半を欠損する。両面が浅く窪む。252～254は砥石である。252は砂岩製で、1側面及び両面を砥面として利用する。両面は使用による窪みが顕著である。253は粘板岩製で、4面を砥面利用する。254は断面梯形を呈し、4面が利用される。安山岩製である。255は安山岩製の石匙で、摘みは方形をなす。自然面が残る。256は黒曜石製の石鏃で、重量は1.1gを測る。

石製品(第34図257～264)

全て石錘で、259を除いては滑石製である。その形態から、断面半球形をなし、中央部に孔を有するもの(257・258)、いわゆる「九州型石錘」と呼称される分銅形のもの(259～263)、紡錘形のもの(264)に分類できる。

257は完形品で、径12.8cm、高さ7.7cm、重量1,725.5gを測る。楕円形を呈する中央孔の他に側面下方から底面を結ぶ径0.9cmの円形の小孔が穿たれる。共に孔端部には使用による紐ずれが認められる。258は1/2を欠損する。復元径11.9cm、高さ8.4cm、残存の重量は669.9gを測る。

259は粘板岩製で、基部の平坦面はやや丸味を帯びる。上下及び側面に3孔を有し、先端部と上孔を結ぶ深い溝が巡る。横断面は丸味のある隅丸方形である。高さ10.6cm、重量243.8gを測る完形品である。260は先細りするものの棒状に近く、基部はやや不安定な平面をなす。側面の2箇所に粗い敲打による浅い抉りをもち、片面の上位にのみ溝を配する。未製品の可能性がある。高さ9.6cm、重量202.1gを測る。261は基部に丸味を有し、先端部は欠失する。下方に穿孔があり、溝によって先端部と結ばれる。全体的に磨滅する。残存高10.1cm、重量218.3gを測る。262の基部は平坦で、横断面は円形を呈する。基部近くに孔を有し、幅広の溝が全周する。全体に丁寧な研磨を施す。高さ7.6cm、重量152.9gを測る完形品である。263は先端部が尖り、小型の円錐形を呈するもので、基部は凸レンズ状をなす。下方の孔から先端部を結ぶ深い溝が配される。全面に縦方向の細かい削痕が残る。完形品で、高さ6.2cm、重量71.3gを測る。

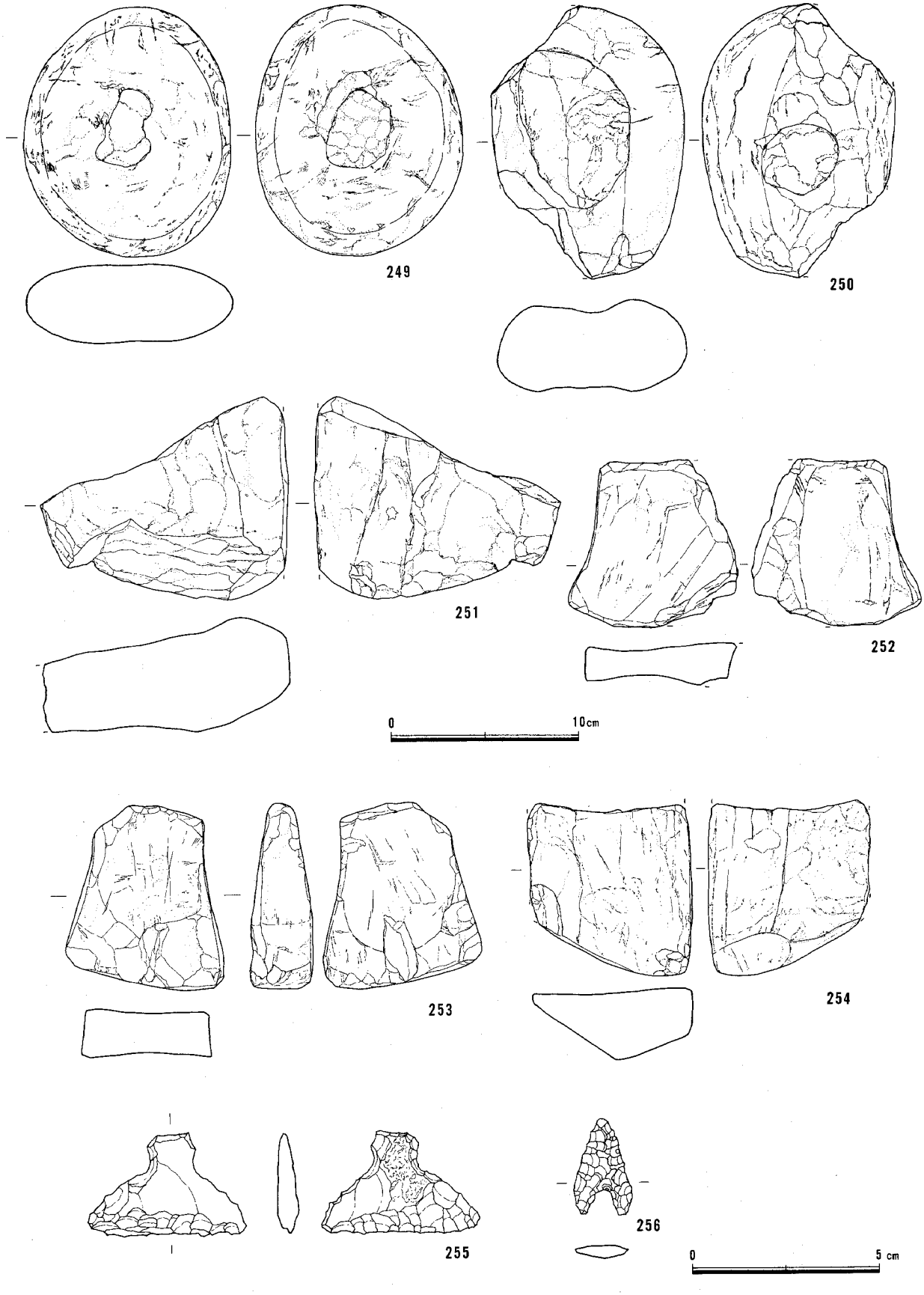
264は細形の紡錘形を呈する。長軸方向に細く鋭利な溝を配するが、平坦な両端部には巡らない。全面にやや粗い研磨を施す。長さ5.7cm、重量12.5gを測る完形品である。

玉類(第34図266～272)

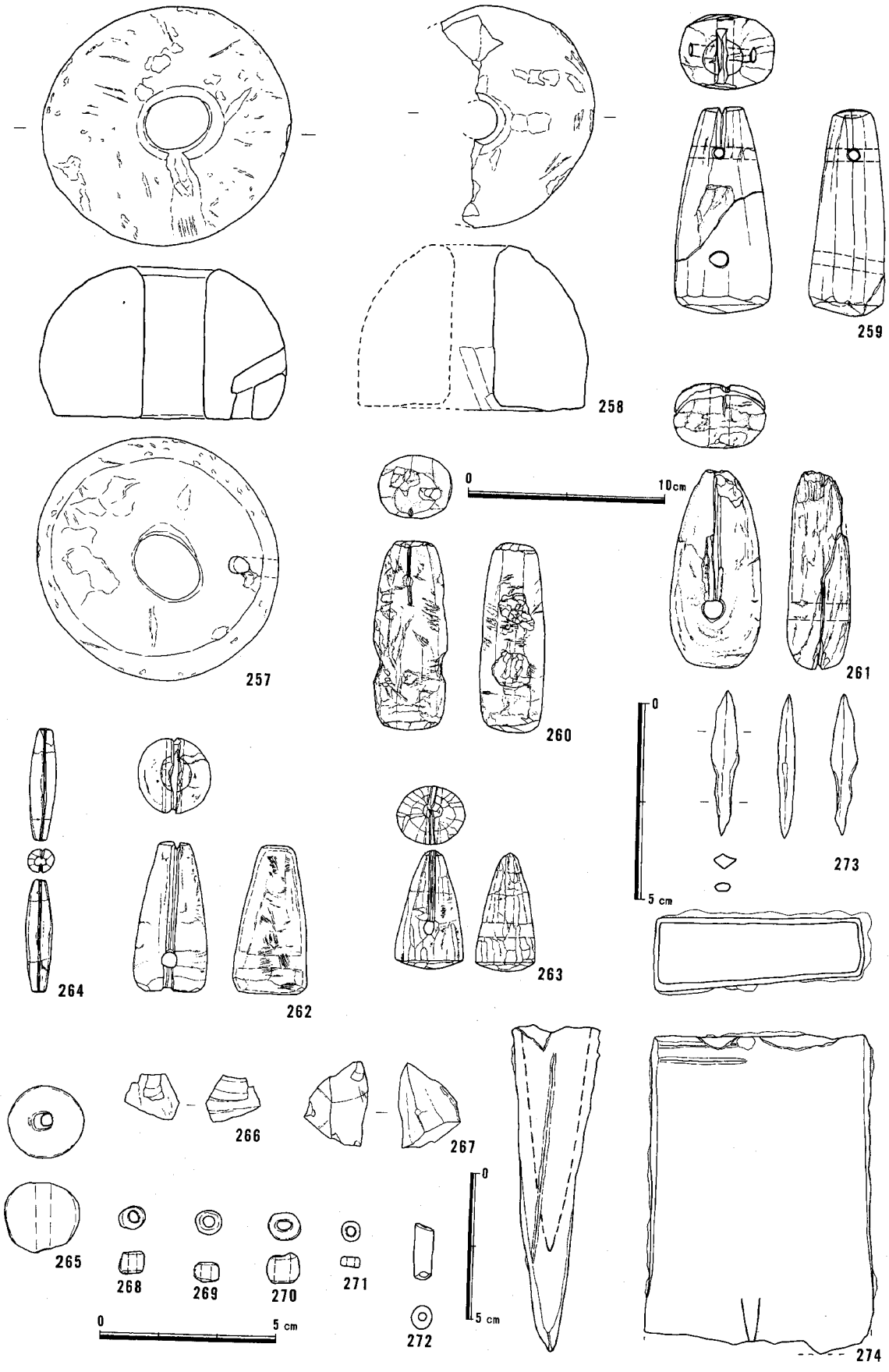
266・267は碧玉のチップ、268～271はガラス製の小玉、272はガラス製の管玉欠損品である。

金属製品(第34図273・274)

273は銅鏃である。つくりは粗雑で、鏑は茎部の上位で消滅する。逆刺は極めて鈍い鈍角で、茎部先端は尖る。身断面は歪んだ菱形である。全長3.7cm、身最大幅7.2mm、身最大厚4.0mmを測る。暗緑色を呈し、遺存状態は比較的良好である。274はB－2区で出土した鋳造鉄斧である。刃部及び基部の一部を欠損し、錆化がすすむ。残存長11.0cm、基部幅7.3cm、刃幅7.7cmを測る。中央部で僅かにくびれ、刃部はやや幅広になる。基部の横断面はやや不整な長方形を呈し、側面は幅が異なる。基部下に2条突帯が片面の一部に観察できる。また、片側側面には鋳合わせの目が不明瞭ながら認められる。



第33図　包含層上層出土遺物実測図14(255・256は2/3、他は1/3)



第34図　包含層上層出土遺物実測図15(266～272は1/1、273は2/3、265・274は1/2、他は1/3)

包含層下層遺物(第35図・第36図)

ここで報告する遺物は5層群中の遺物のうち木器を除いたものである。5層群は4層群の粘質土層の下位に堆積する水性の砂質土あるいは砂層で、谷部の流路、旧河川の堆積物と考えれる。前述したように5層群のうち上位3層(5a～c)に遺物が包含され、5d層以下には人工遺物は認められない。木器を除いた遺物量は上層に比すると少量で、パンケース約10箱である。出土土器は弥生時代中期後半～末が主体となるが、後期も微量含む。また1点のみ縄文土器(298)が出土している。

甕(第35図275～278)

275～277は逆「L」字状の口縁部を有するもので、275は内唇部に粘土を貼り付け、下端部をヨコナデする。口縁部上面は略水平であるが、僅かに内唇部が内傾する。内面は指オサエ、口縁部内外面はヨコナデし、口縁下は鈍く窪む。外面は刷毛目をナデ消す。276の口縁部形態は275に類似するが、内唇部の張り出しが強い。口縁下には低い幅広の三角突帯を巡らせる。口縁部、体部外面はヨコナデするが、口縁部上面には刷毛目が残る。内面は指オサエし、ナデを施す。277も276同様の口縁部を有するが、胴部の張りが大きい。口縁下は強いヨコナデによって凹線状に緩く窪む。口縁部はヨコナデし、体部の内外面はナデを行なう。口縁下に煤の付着が認められる。

278は口縁部を「く」字状に外反させる甕で、胴部が張る。内面の稜はやや不明瞭である。調整は体部外面に粗い縦方向の刷毛目、頸部から口縁部にかけてはヨコナデし、内面口縁下は指オサエが顕著に残る。体部内面は板状工具による擦過、ナデを施す。なお、外面には煤が多量に付着する。

壺(第35図279～286)

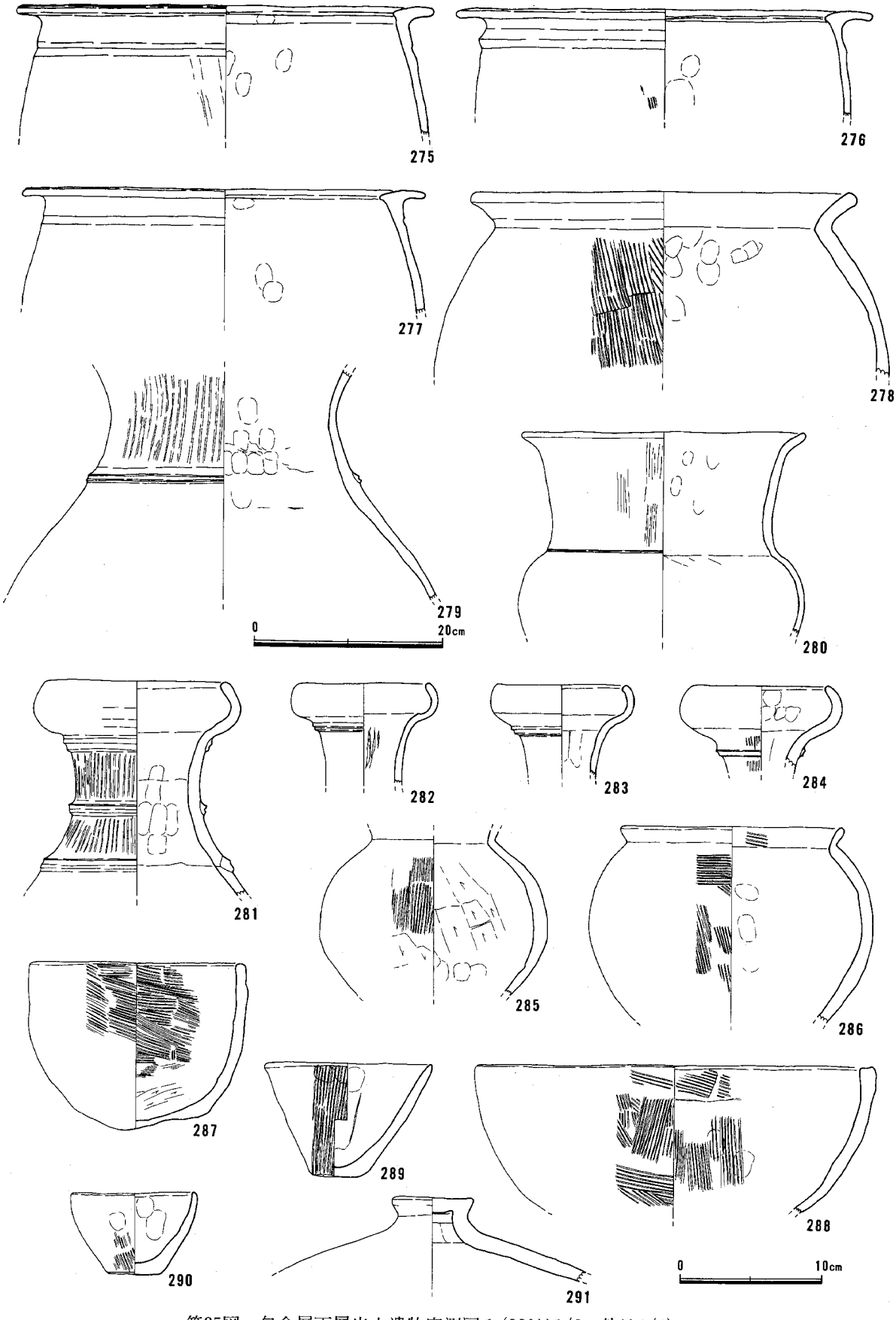
279・280は広口壺である。279は頸部から胴部の上半が遺存し、肩は張らない。頸部のつけねには鈍い「M」字状突帯を有し、頸部には暗文が施される。突帯上下はヨコナデし、胴部はナデ、内面は指オサエ、ナデを行なう。頸部の内外面には赤色顔料が塗布される。280は扁球状の体部に直線的に外傾する頸部に短く外反する口縁部を有し、端部は素口縁である。頸部と胴部の境界に浅い沈線を配する。器面がやや磨滅するが、外面に僅かに赤色顔料が残る。頸部内面は指オサエ、胴部内面はヘラナデ、ナデを施す。復元口径は30.6cmを測る。

281～284は袋状口縁壺である。281は口縁部下、頸部中位及び頸部つけねに「M」字状突帯を巡らせる。口縁部外面は横方向のヘラ磨き、頸部には暗文を施し、口縁部内面はヨコナデ、頸部下は指オサエ、ナデを行なう。外面及び内面頸部上位まで赤色顔料を塗布する。復元口径は12.2cmを測る。282～284は頸部下位を欠失するもので、282・283は頸部がしまり、口縁下には鈍い「M」字状突帯を貼り付ける。器面が磨滅するが、頸部内面にはシボリ痕が残る。284も同様に口縁下に「M」字状突帯を配し、頸部には暗文が認められる。口縁部内外面はヨコナデし、内面は指オサエ、ナデを施す。外面には赤色顔料を塗布する。

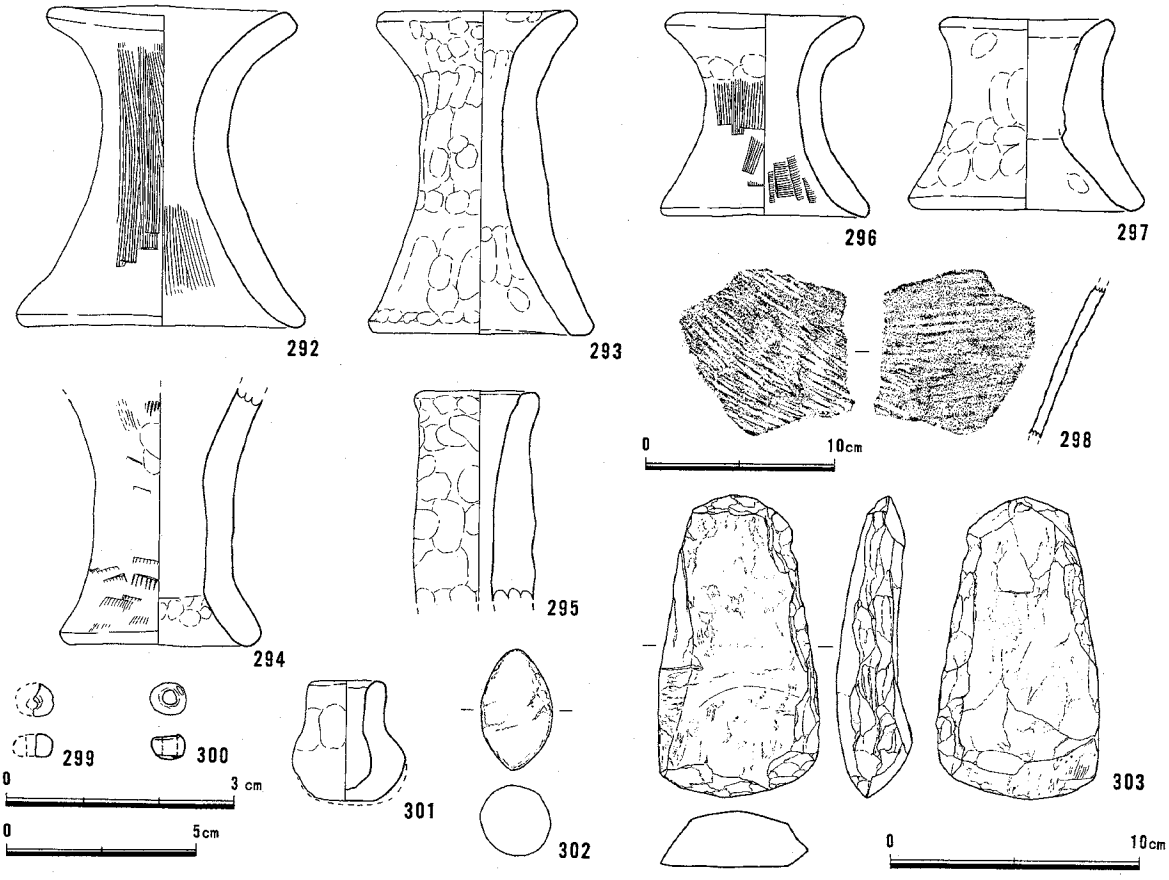
284・285は無頸壺で、球形の体部に短い口縁部を有する。284は口縁端部及び底部を欠失する。外面の口縁下はヨコナデ、体部の中位には刷毛目、下半は削りを加える。内面はヘラあるいは板状工具による粗いナデで、下半には指オサエが残る。285は器面がやや荒れるが、体部外面は刷毛目、口縁部内外面はヨコナデし、内面は指オサエ、ナデを施す。口縁部内面には僅かに刷毛目が遺存する。また、内外面には赤色顔料が部分的に残り、体部上位には黒斑を有する。

鉢(第35図287・288)

287は不安定な平底風の底部に直線的な体部が上方に延びる。内外面の上半部は粗い横方向を主体とする刷毛目、下半部はヘラ削りを施し、砂粒の移動が目立つ。器面は凹凸が著しく、粗雑なつくりである。288は復元口径28・0cmを測る大型の鉢で、口縁部が大きく開く。口縁部上端は面をなし、ヨコ



第35図　包含層下層出土遺物実測図１（280は1/6、他は1/4）



第36図　包含層下層出土遺物実測図２（299・300は1/1、302は1/2、301・303は1/3、他は1/4）

ナデにより僅かに窪む。内外面に刷毛目を施し、口縁部にはヨコナデを加える。

ミニチュア土器（第35図289・290）

共に鉢形を呈し、289は小さな底部から体部が直線的に大きく開く。外面は縦方向の刷毛目、内面は指オサエ、ヘラナデ、口縁部はヨコナデを行なう。口径11.8cm、器高8.0cmを測る。290は口縁部をやや内湾気味に収める。外面は縦方向刷毛目、内面は指オサエ、ヘラナデを施す。復元口径8.8cm、器高5.8cmである。

蓋（第35図291）

甕の蓋で、天井部につまみを有する。内外面をナデで仕上げる。

器台（第36図292～295）

円筒形の器台である。292は上下に大きく開き、外面及び脚部内面には刷毛目、他はナデ調整する。丁寧なつくりである。293は上位ですぼまり受部が比較的明瞭である。内外面に指オサエし、器面に凹凸が顕著である。296・297は小型の器台で、296は292同様に上下に大きく開く。外面及び脚部内面に刷毛目を施す。297は上位ですぼまり、受部の外反は弱い。外面は指オサエ、ナデを加える。内面は器面が剝落する。294は刷毛目、指オサエで調整する。295は器壁が厚く、受部の開きは緩い。器面の調整は指オサエによる。

深鉢（第36図298）

縄文土器の細片である。内外面条痕調整し、外面には煤が付着する。胎土には砂粒を多量に含む。

玉類（第36図299・300）

共にコバルトブルーのガラス製小玉である。299は欠損する。

手捏ね土器(第36図301)

指オサエにより、粗雑に壺形をつくりだす。外底部は器面が剥落する。

土製品(第36図302)

投弾で、ナデて仕上げる。長さ3.2cm、重量9.7gを測る。

石器(第36図303)

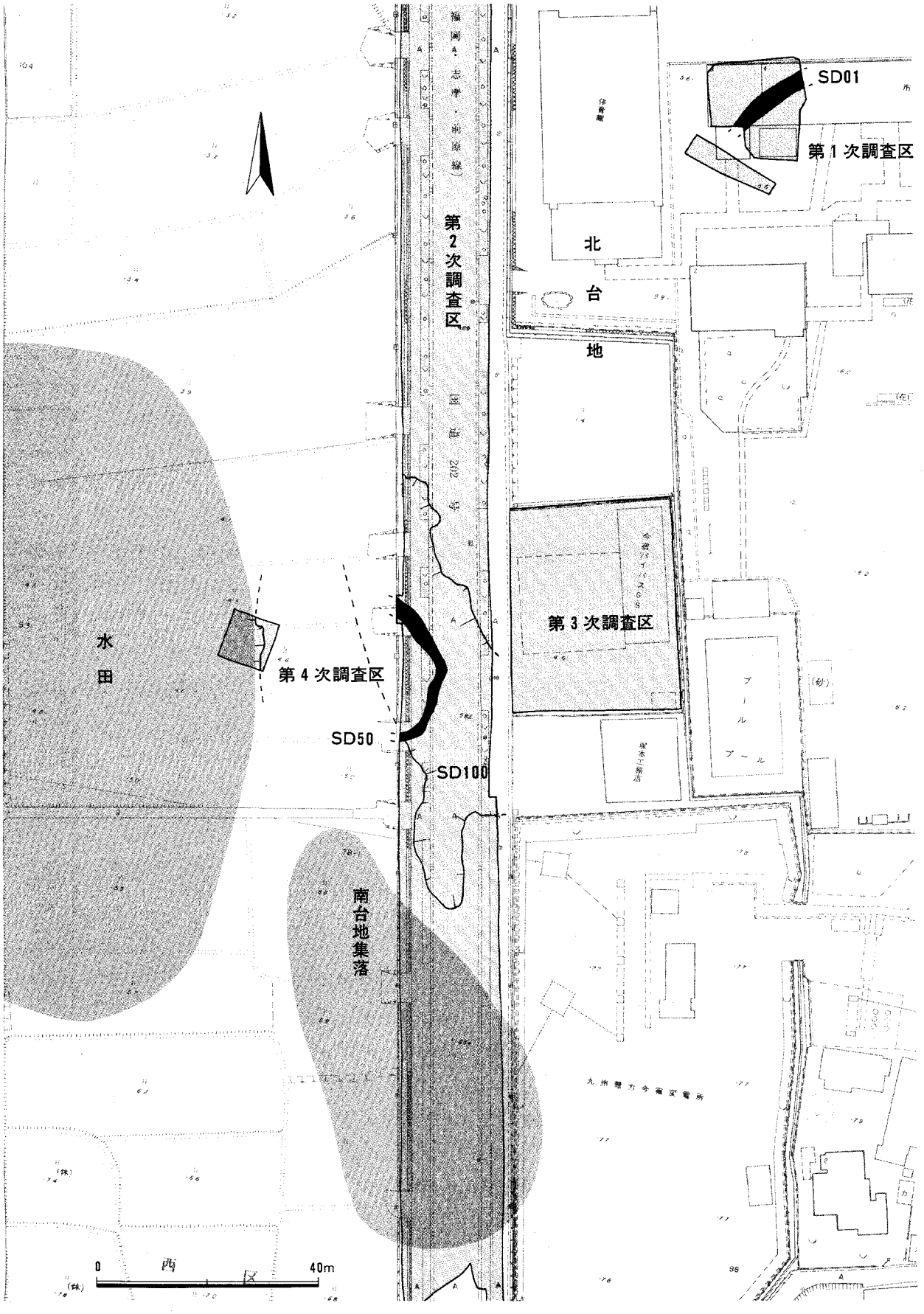
安山岩製の石斧である。磨製石斧の再利用と考えられ、両側縁、基部、刃部の片面を調整する。

4．結語

今回の調査区は81㎡という狭小な面積であったが、隣接する既往調査区との関連や、台地落ち際に形成された包含層から出土した遺物から本遺跡の構成や内容を考察するにある程度の情報を寄与するものと考えられる。以下、本調査区での遺構、包含層の時期的位置付け及び周辺調査区を含めた本遺跡内の集落変遷について簡単にまとめたい。

遺構、包含層について　調査区東側の台地部周縁部では弥生時代中期末～後期初頭の土坑、ピットが検出されたが、密度は薄い。ＳＫ001･002は底面から加工材が出土している。台地落ち際から西側の谷部にかけて確認された包含層は土質より上下層に分離され、砂層が主体の下層は出土遺物より弥生時代中期末に形成されたものと考えられる。土器と共に杭列、木器、自然木が出土している。また、下層以下は水性堆積物の堆積が顕著で、流路であったと考えられる。その下層包含層上面よりＳＤ015･017･018が掘り込まれており、包含層形成直後の時期から後期初頭にかけて掘削されている。その上層粘質土には後期前半を主体に古墳時代前期を上限とする遺物が多量に包含される。完形品は少量であるが、破片資料としては遺存度が比較的良好で、接合により完形近くに復元できた個体も存在することから、東側台地部からの廃棄、流れ込みと推察される。なお、166（瀬戸内系か)･167（中部瀬戸内系)･200（山陰系）等の外来系の土器の他、鋳造鉄斧（274）が出土しており、海洋を介した内外の交流を看取することができる。第１次調査においても中部瀬戸内系の土器が出土している。また、第２次調査同様に石錘等の漁撈具及び木製農耕具が出しており、同調査で考察された半農半漁の生業形態を伺うことができる。

集落変遷について　周辺調査成果を基軸として弥生時代集落の変遷について若干のまとめを行いたい(第37図参照)。本遺跡の立地する台地は第２次調査ＳＤ100によって南北に分断される。ＳＤ100は堆積状況より台地を開析する谷状の流路と考えられ、後期初頭には埋没している。第２次調査での呼称を用いて、この流路を境界に北･南台地と仮称する。まず、中期中葉に南台地に竪穴住居･掘立柱建物で構成される集落の萌芽が認められる。中期後半から後期初頭にかけて前段階の位置に重複し、集落は継続する。ＳＤ100に投棄された多量の遺物の大半は該期に帰属しており、著しい発展を伺わせる。略同時期には本調査区で確認された杭列、溝が台地際に設置されており、西側の谷低地部分は耕地としての可能性を考えておきたい。今回の調査では直接的な水田遺構等の確認はできなかったが、舌状台地間の低地部分は小平野内での可耕地であり、積極的な利用が図られたことが推察される。また、ＳＤ100埋没後の後期初頭には第２次調査ＳＤ50、後期前半には北台地の北端に第１次調査ＳＤ01の環濠が掘削される。第２次調査区の北台地上では弥生時代の遺構は未検出であり、ＳＤ01の集落はやや隔絶した位置に単独に位置する可能性が高い。環濠の規模、内部の構成は両者共に不明であるが、ＳＤ50は第４次調査区まで延長する可能性は低く、小規模であったと考えられる。また、同時期に南側台地に集落は継続しており、双方の遺跡内での位置付けは今後の課題といえよう。



第37図　今宿五郎江遺跡集落位置図（1/1,000）

付　論

壺形土器に用いられた赤色顔料及び赤彩の漆膜について

本　田　光　子

A－3区包含層上層出土の壺形土器（第27図166）の赤彩に用いられた赤色顔料と、同出土の赤彩のある漆膜について、顕微鏡観察、蛍光X線分析および塗膜構造調査を行った。

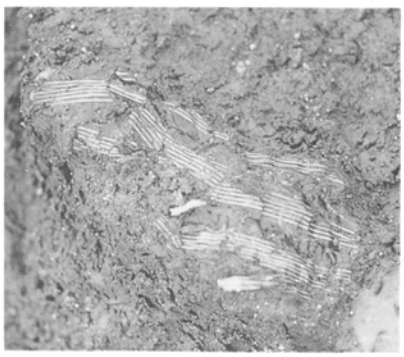
壺形土器

土器の外面に赤彩されており、土器焼成後になんらかの固着剤により赤色顔料を塗彩しているように見受けられる。赤色部分から針先に付く程度の試料を採取し顕微鏡観察を行った所、朱と思われる非常に微細な粒子が認められた。土器小破片について蛍光X線分析の測定を行った所、赤色顔料の由来となる元素として、鉄と水銀が検出された。水銀は赤彩のある部分からだけ検出され、鉄に対する水銀の強度は大きかった。鉄の強度は赤彩のある部分とない部分で特に変らなかった。以上により、土器に塗彩されている赤色顔料は朱であると判断した。固着剤の種類は今回の調査ではわからないが、漆のような顕著な膜は認められない。ただし、土器塗彩の表面状態は埋蔵環境により大きな違いを見せることもあるので、現時点では判断できない。

弥生土器の赤色装飾は、いわゆる丹塗磨研土器に代表される焼成前塗彩と彩文土器に代表される焼成後塗彩に大きく分かれる。前者の赤色はベンガラに由来するものであるが、後者はベンガラの場合と朱の場合がある（まれに併用される）。ただし、朱が用いられた例は非常に少なく、北部九州地方前期の彩文土器に数例である。理科学的方法による分析例が少ない現時点でははっきりといえないが、焼成前丹塗りが一般的となると、例えば島根県西谷3号墓等で見られるように特別な状況で使われた土器にだけ朱を塗彩するようである。いずれにしても北部九州地方での「朱」塗り土器としては本例が初めてであり、弥生時代中期後半から認められる、特別な木器への固着剤不明の「朱」彩と連動したものと考えられる。

赤彩漆膜

木胎は腐朽し漆膜だけが残っている。写真に示すように全体は約10×3.5㎝であるが、縦横に割れた状態である。黒地に赤色の併行細線が描かれている。破片の一部について蛍光X線分析を行った所赤色の由来となる元素として鉄と水銀が検出された。鉄の強度は水銀に比べてきわめて低いものであった。また、赤彩部分を含む数㎜角の破片をエポキシ樹脂に包埋、研磨し薄片を製作し、塗膜構造を観察した。木炭粉を混和した層の上に黄褐色を呈する透明な漆層があり、その上に朱と推定される細かい粒子が混和された層が認められた。



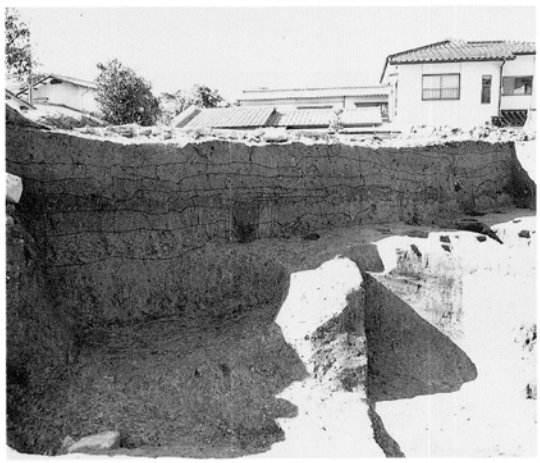
赤彩漆膜出土状況

以上の結果から、本例は北部九州地方の縄文晩期末から弥生初頭に出現し中期後半頃から衰退する、規格性の高い漆工技術に見られる塗膜構造である。この種のいわゆる鉄線描とも呼ぶべき文様を持つ漆器は、菜畑遺跡、瓦町遺跡、湯納遺跡、拾六町ツイジ遺跡、三筑遺跡、雀居遺跡、原ノ辻遺跡、惣利遺跡等出土しているが、使用されている赤色顔料は皆ベンガラである（湯納遺跡例は不明）。本例は朱を用いている点に大きな特色を持つと言えよう。

図　　版

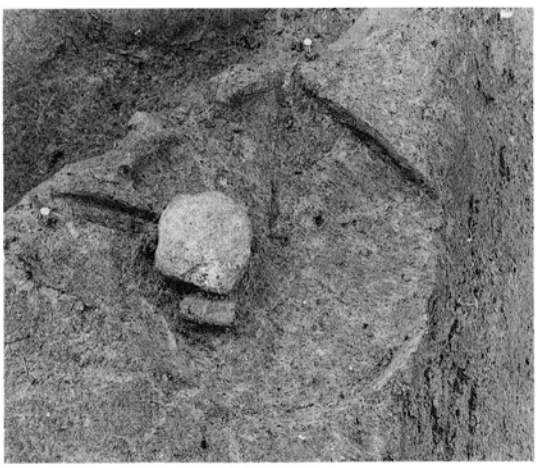
今宿五郎江遺跡第 4 次調査風景

(1)調査区全景（東から）

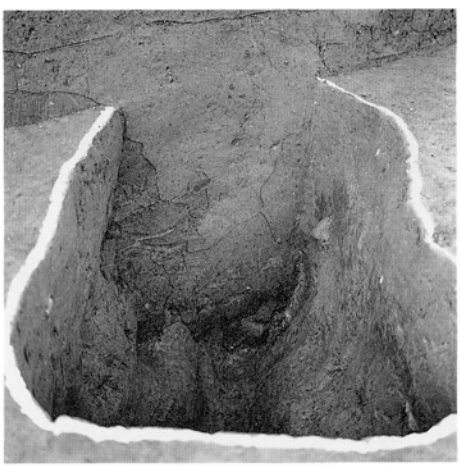


(2)西壁土層

(3)北壁土層



(4)ＳＫ11（東から）



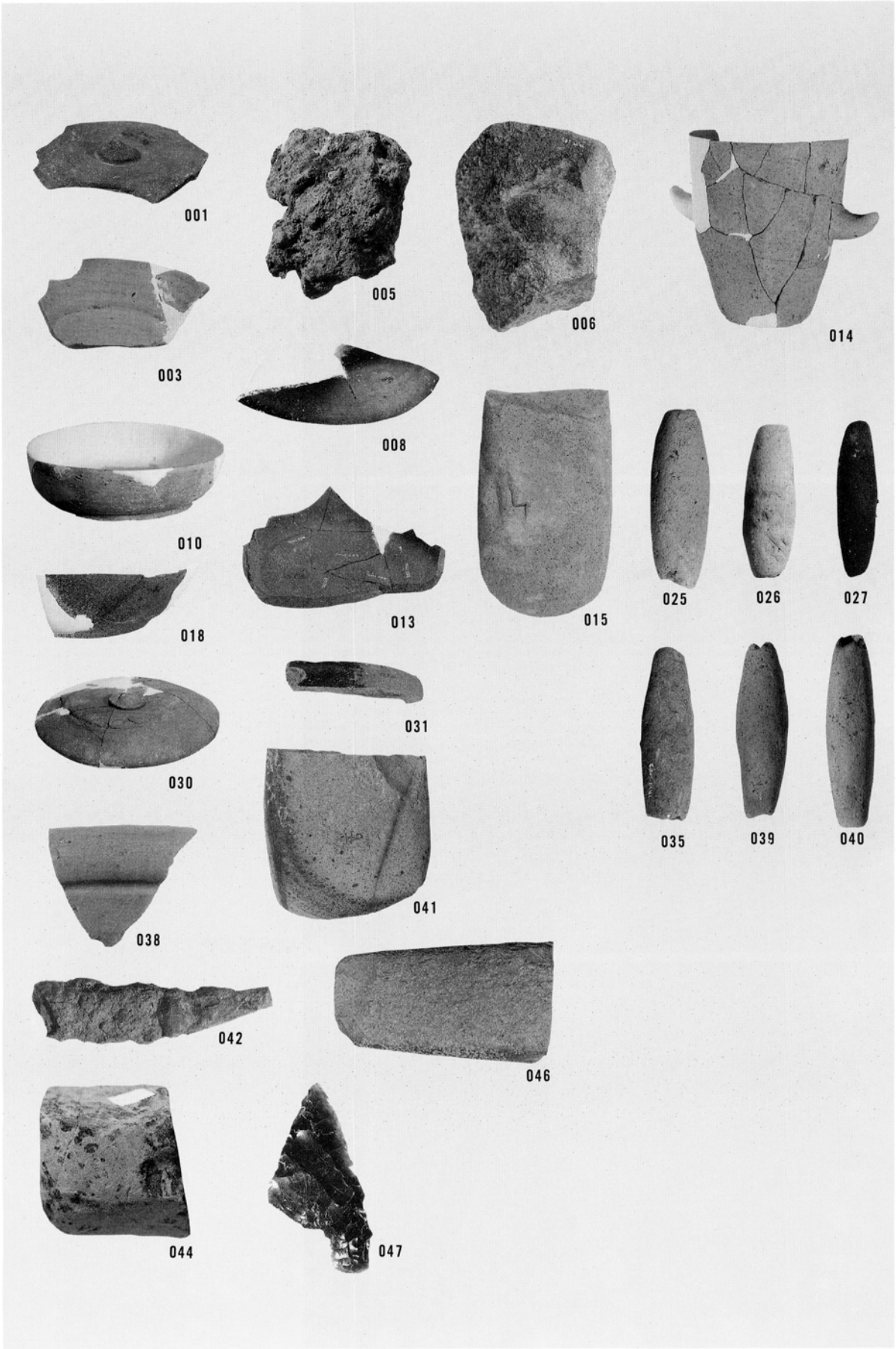
(5)ＳＫ02土層（南から）

図版２　　徳永Ａ遺跡・丸隈山遺跡群

(1)飛行機格納庫北壁（東から）（徳永Ａ遺跡）

(2)格納庫排水施設（徳永Ａ遺跡）

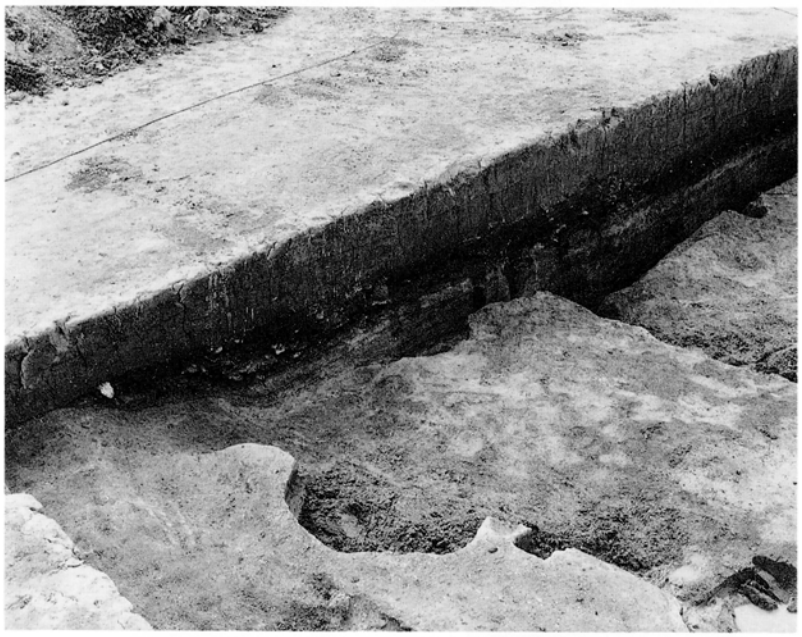
(3)丸隈山遺跡群第１次全景（南から）


001
003
005
006
014
008
010
013
015
025
026
027
018
031
030
035
039
040
038
041
042
046
044
047

徳永Ａ遺跡出土遺物

図版 4　　今宿五郎江遺跡

(1)調査区全景（北から）



(2)南壁土層（北東から）

(3)木器出土状況（南から）

(1)ＳＫ001（北から）

(2)ＳＫ002（東から）

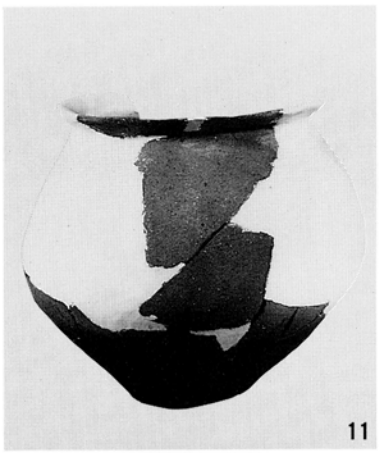
(3)ＳＫ010（南から）

図版 6　　今宿五郎江遺跡

(1)包含層遺物出土状況

(2)鉄斧出土状況

(3)含包層掘り下げ風景

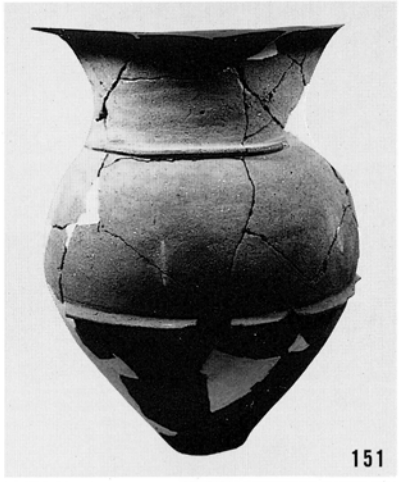

11

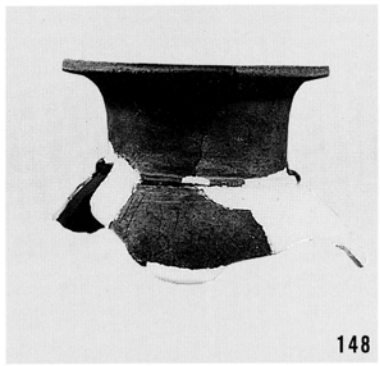
91

116

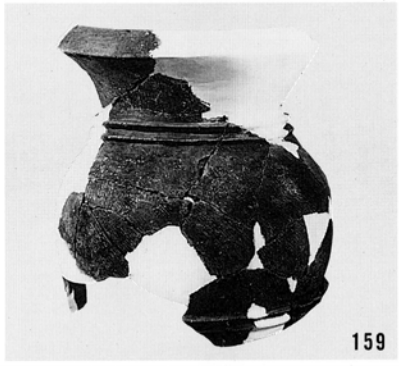
94

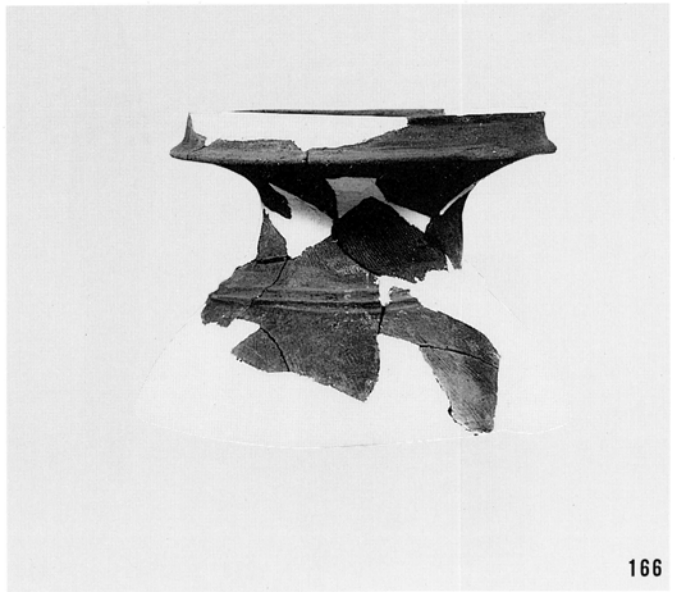
120

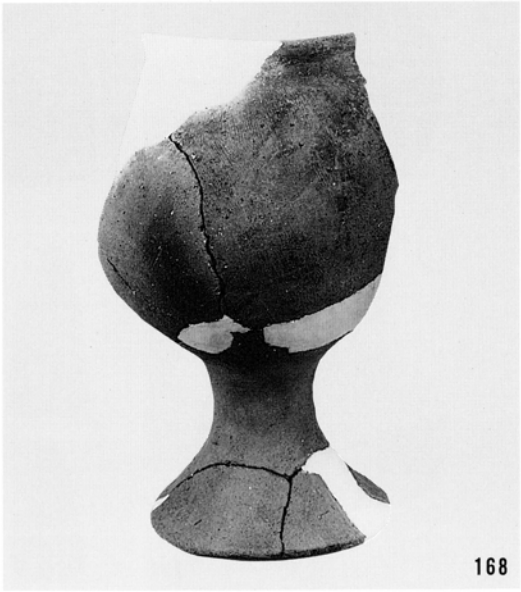

151


148

156


159


166


168

今宿五郎江遺跡出土遺物Ⅰ

図版 8

今宿五郎江遺跡

今宿五郎江遺跡出土遺物II

今宿五郎江遺跡III

— 第4次調査報告 —

徳永A遺跡III

— 第3次調査報告 —

丸隈山遺跡群I

— 第1次調査報告 —

— 九州電力鉄塔建設に伴う発掘調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第479集

1996年（平成8年）3月29日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 赤坂印刷株式会社

福岡市中央区大手門1丁目8－34